

第1回 COE国際シンポジウム 非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～

日時：2005年11月26日(土)・27日(日) 10:00～17:00(受付 9:30～)
会場：神奈川大学横浜キャンパス 16号館セレストホール 使用言語：日本語・英語・中国語(同時通訳)
申込：参加無料。参加ご希望の方は11月10日(木)までに氏名、住所、電話番号、参加日を明記の上、ハガキが
ファックスでお申込みください。Fax.045-491-0659

プログラム 第1日目 11月26日(土)

9:30～10:00 受付：セレストホール
10:00～10:05 開会挨拶：山火 正則(神奈川大学学長)
10:05～10:20 主催者挨拶：福田 アジオ(神奈川大学教授・COE拠点リーダー)
10:20～12:00 **基調講演**
「非文字資料から見る人類文化」
川田 順造(神奈川大学教授・COEサブリーダー)
13:00～14:45 **セッション**
「記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」
[コーディネーター] 北原 系子(神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者)
[パネリスト]
・原信田 實(国際浮世絵学会会員・2003年度COE共同研究員)
「見えない都市 出来事を語る江戸の錦絵」
・セバスチャン・ドブソン(イギリス、写真歴史家)
「写真による日本に対してのまなざしの形成」
・コンスタンチン・グーバー(ロシア、ロシア海軍博物館チーフアーティスト)
「航海と発明の先達アレクサンダー・モジャイスキーが残した芸術と科学の遺産」
[コメンテーター]
・渡辺 俊夫(イギリス、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授)
・金子 隆一(東京都写真美術館学芸課専門調査員・COE共同研究員)
15:00～16:45 **セッション**
「身体技法と祭祀芸能 祭祀者の動きと人形の動きから」
[コーディネーター] 廣田 律子(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
[パネリスト]
・張 勁松(中国、湖南省民間文芸家協会副主席)
「中国瑶族の祭祀者の身体技法」
・田 耕旭(韓国、高麗大学民俗学研究所所長)
「韓国の祭祀芸能における身体技法」
・大谷津 早苗(昭和女子大学助教授)
「人形から見る身体技法」
[コメンテーター]
・康 保成(中国、中山大学教授)
・山口 建治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

プログラム 第2日目 11月27日(日)

9:30～10:00 受付：セレストホール
10:00～10:15 開会の辞
10:15～12:00 **セッション**
「民具と民俗技術」
[コーディネーター] 河野 通明(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
[パネリスト]
・周星(愛知大学教授)
「中国民俗学は日本の民具研究から何を学ぶべきか」
・尹 紹亭(中国、雲南大学教授・人類学博物館館長)
「中国木製製の形態と分布」
・高 光敏(韓国、済州大学博物館学芸研究員)
「排泄の民俗と民具 済州島・韓半島・舟山島の比較」
[コメンテーター]
・近藤 雅樹(国立民族学博物館教授)
・安室 知(国立歴史民俗博物館助教授)
13:00～14:45 **セッション**
「非文字資料の情報化と教育」
[コーディネーター] 的場 昭弘(神奈川大学教授・COE共同研究員)
[パネリスト]
・白 庚勝(中国、中国民間文芸家協会副主席)
「中国における文化遺産の保護について」
・ジュヌヴィエーヴ・ガロ(フランス、パリ国立文化遺産研究所校長)
「フランスにおける文化遺産の保護について」
・能登 正人(神奈川大学助教授・COE共同研究員)
「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」
[コメンテーター]
・アラン＝マルク・リュ(フランス、リヨン第3大学教授)
・橋川 俊忠(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
15:00～16:45 総合討論
[コーディネーター] 佐野 賢治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
各セッションの報告/討論/まとめ
16:45～17:00 閉会挨拶

COEプレシンポジウム 「版画と写真～19世紀後半 出来事とイメージの創出～」

日時：2005年11月20日(日) 10:30～16:30 会場：神奈川大学横浜キャンパス 16号館セレストホール 参加無料
基調講演 10:40～12:00 木下 直之(東京大学教授)「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」
シンポジウム 13:30～16:30 原信田 實(国際浮世絵学会会員・2003年度COE共同研究員)「『名所江戸百景』における構図の新解釈」
鈴木 廣之(東京文化財研究所日本東洋美術室室長、COE共同研究員)「変貌する明治の図録」
金子 隆一(東京都写真美術館学芸課専門調査員、COE共同研究員)「内田九一の西国巡幸写真」
増野 恵子(早稲田大学非常勤講師、2004年度COE共同研究員)「見える民族、見えない民族 『輿地誌略』の世界観」
パネルディスカッション コーディネーター 北原 系子(神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者)

同時開催 企画展示 「浮世絵における常識と非常識～複製版でみる『名所江戸百景』～」

日時：2005年11月18日(金)～30日(水) 12:30～16:30 *23日(水・祝)休室 *20日(日)・26日(土)・27日(日)のみ10:00～18:00
ミュージアムトーク：11月18日(金) 14:40～15:40、26日(土) 15:00～16:00(摺り実演あり)、27日(日) 12:00～13:00(摺り実演あり)
会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室 入場無料

非文字資料研究 No.9

発行日 第9号 2005年9月30日発行
編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp>

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



表紙写真説明



アフリカではHIV/AIDSが暴威を揮っている。スワジランド王が若者たちに完全な性的禁欲を命じて世界を驚かせたほど、事態は深刻だ。ケニアでは、若者たちの心を捕らえようと、首都ナイロビで生まれ、まだ正書法もないシェン語でキャンペーンが繰り広げられている。そのシンボルマークが、右側にChillの語を添えた独特のVサイン。マスメディアを通じてあっという間に全国に波及したシェン語は、今や若者の共通語になった。

ポスターは、非文字資料と文字資料とが大きな相乗効果を生む、有力なメディアの一つである。

(小馬 徹) 本文P.10~P.13 参照

巻頭言	3
橋川 俊忠 (日本常民文化研究所所長・COE事務局長)	
対談	4
修験道と日本文化 その象徴する世界	
宮家 準×佐野 賢治	
研究エッセイ	ESSAY
Sex? Hapana, tume-chill	10
「非文字」の混合言語、シェン語のVサイン	
小馬 徹	
民俗芸能のデジタル化の取り組み	14
廣田 律子	
平安時代の和歌と呪術	16
繁田 信一	
フィールドノート	Field Note
古代地域史研究と出土史料	18
「加賀郡勝永札」の史料性格	
前田 禎彦	
海外博物館事情	Foreign Museums
コンゴ	
コンゴ国立美術館研究所(IMNC)	20
ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ	
研究会報告	WORKSHOP REPORT
衹い儀礼から見た呉越神歌の文化史的意義	22
顧 希佳	
コラム 日本での十日間	24
フェルナンド・カルロス・シャマス	
コラム 町の商店街と商業民俗研究	25
韓 同春	
コラム 同時代を見る眼と博物館	26
丸山 泰明	
コラム Ethnologueから見る言語危機の拡大	27
宮本 大輔	
主な研究活動	28
彙報	31
Report & Information	32

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



日本常民文化研究所所長・COE事務局長

橋川 俊忠

本COEがスタートしてから二年半がすぎた。リーダー以下事務局も含めた全構成員の努力によって、所期の目標からすれば十分とはいえないまでも、それなりの成果は挙げてきた。三年目以降情報発信と理論化に重点を移行するという目標も、その実現に向かって着実に一步を踏み出しつつある。そして、このような段階に対応するために、中間評価報告書でも明らかにしているように、研究課題の整理・統合とより柔軟で機動的な組織への改編の方針を提起し、推進会議で承認を得た。中間評価の結果はまだ出されていないが、われわれとしては、当初の計画通り、第二段階への移行の準備を整えたと考えている。

この第二段階への移行に当たって、われわれが想起しなければならないことは、事業計画の柱の一つでもあり、評価基準の一つでもあった「社会に対してどのような貢献が期待されるか」という課題である。もちろんデータの集積、分析手法の開発、研究成果としての論文・データベースの公開・シンポジウムの開催等による知識の共有化等も立派な社会への貢献にちがいないが、ここではもう少し直接的な社会貢献の問題を検討する必要があると、われわれは考えている。

社会・人文科学の場合、自然科学の発明・発見のように目に見えやすい貢献はなかなか困難であることはいうまでもない。しかし、社会・人文科学は、その研究対象が生活する人間に直接関わり、生活の場である「地域」そのものであることが少なくない。したがって、その社会への貢献は、生活する人間と「地域」に対するものでなければならない。われわれが、第二段階において中心的課題として設定した「新しい展示方法の開発」と「地域における統合情報発信」という課題は、まさにそうした社会への貢献という課題に応えようとするものである。

安易な実用主義的「貢献」ではなく、確実な調査・研究の成果を踏まえた学問的水準に立った展示・情報発信の実現による「貢献」は、その準備作業自体が学問活動の重要な一環を占めることを自覚したい。ともすれば学界的功績を挙げることに関心を向けがちな研究者として自戒の念を込めつつ、広い視野に立って市民の参加、自治体からの協力をえつつ、新しい試みに挑戦していきたい。



対談

宮家 準

国学院大学大学院講師・慶応大学名誉教授

×

佐野 賢治

神奈川大学教授・COE事業推進担当者

修験道と日本文化 その象徴する世界

民俗宗教としての修験道

佐野 修験道は日本人の自然観、精神文化を集約した宗教といえます。修験道儀礼を体系化する宮家先生のお仕事は、身体技法、自然景観を非文字資料として扱うわれわれのプロジェクトにとり大変参考になります。まず近刊『霊山と日本人』(2004年、NHKブックス)の視点からお話をいただけますか。

宮家 山への信仰は日本だけではなく世界各地にあります。アジアでは中国の泰山、朝鮮半島の白頭山、思想的には仏教の須弥山などが思い浮かびます。多神教でも一神教でも山が宗教者の神秘体験を得る場になっている。世界各地の山の信仰の比較により本質的な宗教のあり方を探るといって問題意識です。

佐野 その中で、霊山に注目する。

宮家 霊地は神がいると同時に死霊の赴く世界、魂の源郷で、山が比定されることが多い。修験道の成立は日本人の霊山信仰を基盤にしています。宗教研究には大きく創唱宗教の教学的立場と日本文化のあり方の中で考える民俗宗教的立場があります。個人の悩みを救うために創唱宗教が成立しますが、教学の布教活動が中心であり、庶民の現実の苦悩には答えられない面があります。その間に介在したのが念仏聖、陰陽師、修験などの民間宗教者です。修験道は教祖のない宗教ですから民俗宗教がベースにあって、その論理の中に必要に応じて仏教、成立神道、儒教、道教を取り入れていきます。

佐野 民族宗教でなく民俗宗教として修験道を考えられ

るのは何故ですか。

宮家 あえて人偏の俗を使うのは、人々の生活実態の中で宗教を捉えたいからです。nation(民族)では国家との結びつきが強くなってしまいます。

佐野 戦前まで日本の民族宗教は神道といわれましたが、仏教が除かれ該当しない。西南中国のイ族^な族^し族^はではそれぞれピモ教^{とんば}、東巴教が生活文化の規範、民族のアイデンティティになっています。自然信仰・シャーマニズム・祖先崇拜をベースに儒仏道を混交した重層性も修験道と類似します。言葉やトーテムの共通性では不十分です。エトノス、民族の核としての民俗宗教の意味に気づきました。修験道を民俗学が研究する一つの立場だと思えます。

宮家 佐野さんは虚空蔵信仰を研究されていますが、十三仏の最後、三十三回忌の甲上げの主導は虚空蔵ですね。一方、イニシエーションとして十三参りがあります。祖霊、人間として完成するいずれの場合も最後に虚空蔵が絡んでいる。山伏の場合は、いわゆる逆修で、生前に十三回山に登るとホトケになる。

佐野 仏教学の先生たちは虚空蔵信仰に興味を示さなかった。密教の中でも秘法中の秘法であり、修法も難しいし、文字、記録にも残らなかった。

宮家 自然や天地に感応することによって記憶力を増進する虚空蔵求聞持法が南都仏教の修行の原点ですね。一種の神秘体験を得ることであり、高僧の求聞持法の修法は在俗の仏教者にとってはタブーになっている(笑)

佐野 空海も日蓮も修しています。インドでは八大菩薩の一つですが、中国、朝鮮では信仰はない。日本では現在でも民間信仰の対象で、信者は鰻を食べない。黒潮文化の鰻と北伝仏教の虚空蔵信仰の結合は、日本文化を考えるヒントを与えてくれます。

宮家 弥勒はどうですか？

佐野 弥勒といえば宮田登先生ですが、中国、朝鮮で信仰され、布袋との習合や民衆道教との関係が興味深い。

宮家 東アジア全体で通底するものがある。

山岳信仰の比較 アジアを中心に

佐野 英彦山の恒雄など、修験の源流と朝鮮半島との関係が注目されていますね。

宮家 白山と白頭山信仰、修験と花郎の関係などを調べてみたい。

佐野 新羅花郎の精神は今でも韓国では生きています。

宮家 残っているのですか。

佐野 慶州では花郎として、成績人格共に優れた男女の高校生を選んで表彰しています。ところで、仏教の須弥山の構造は複雑ですね。

宮家 天地を結び中心のシンボリズム、柱の信仰ですね。日本では古事記の天の瓊矛、伊勢神宮の心の御柱となる。修験道では柱源護摩、天理教では甘露台。須弥山を亀が支え、上では鶴が舞う。正月には鶴亀が登場し、目出度い時も不幸のときも「鶴亀、鶴亀」と唱える。年越し、結婚式でそばを「つるっと飲んで、くつとかめ」で、宇宙を作り変えるシンボリズムになる。

佐野 そこまで深い意味が(笑)

宮家 東南アジアの王様の葬式では須弥山をつくりその上で火葬します。

佐野 アジアの山岳信仰を考える場合、塚の問題があります。モンゴル族のオボ信仰はハンオラ、山への信仰と関連します。“社”は土盛りであり、オボにその痕跡を残すと白川静先生は言っています。その中心はボラ科の木です。

宮家 日本でも木偏に土を書いて杜です。土の上の木ですね。

佐野 修験が日本文化に果たした役割の一つは霊山信仰を体系化したことです。十三仏は日本人の葬送や他界観に必須ですが、十三塚として東北地方で始まり、関東では十三仏板碑、近畿では十三仏塔として発現します。

宮家 熊野比丘尼が持ち歩いた絵解きの掛図に十三仏があり、人の死後から再生までが描かれ、大峰山修行の本『峰中秘伝』にも十三の行場での修行が十三仏と関係づけて説かれています。塚で興味があるのは、前方後円墳です。丸い後円部は山で、亡骸を納め、前方部で祭祀をします。山と里の関係を表し、しかも周囲を水で囲んでいます。ミクロの世界で日本人のコスモロジーを表している。

佐野 朝鮮半島にも分布しますが、分布の特徴、数から言えば日本独自ですね。円部が山で墓、方部が祭祀部となると両墓制です。従来、前方後円墳は大型古墳で近畿に特徴的に分布すると言われてきた。今最も分布するのは関東地方です。東北地方では、中世の壇とみなされてきた古墳を再調査すると軸線上に奥山があり、山岳信仰と関係するらしい。

宮家 チベットのカイラス山は巡礼で有名ですね。富士山のお鉢回り、西国巡礼、四国遍路も霊地を回ります。修験の場合、吉野から熊野、本来ならば熊野から吉野ですが、その場合、熊野は死、吉野は再生の山です。死と生を繰り返す巡礼タイプと、一所をグルグル回るタイプがある。比叡山の回峰行もそうです。巡りの宗教性はシャーマンの神憑けに通じます。

佐野 チベットでは鉱山がない、聖なる山を掘ってはいけない。チベットが栄えたのはインドとの交易ですが、支えたのは砂金だった。聖山への登山もタブーです。チベット系納西族の東巴儀礼では玉龍雪山を鋤先で模して表します。民俗学では個別事例の記述になってしまいがちですが、先生による山岳信仰の体系化が期待されます。

修験道の歴史

佐野 修験の起源は役小角に始まると言われるますが、いわゆる自然宗教ですか？

宮家 修験は縄文文化の伝統を引くという説がありました。修験という言葉には三つのレベルがあります。一つは普通名詞として験を修める修験、一つが密教の験者の中で修行して験があるものを平安中期以降に験を修めたものとして修験と呼ぶようになったというもの。もう一つが室町初期頃に教義が固まってきた教団としての修験で、歴史学の人々は文献の初出から修験を室町以降と捉え、宗教学者は宗教的な形態の発現の平安末を起源とします。佐野 一般的には奈良時代の優婆塞仏教、平地型の行基

対談



宮家 準
国学院大学大学院講師・慶応大学名誉教授

に対し山岳型の役小角を創始者としませんが、大官大寺の僧侶たちが関係した奈良時代の自然智宗あたりから形式が整ってくるとは考えられないでしょうか。

宮家 そこまでは遡れないと思います。

佐野 修験道の系譜の中間点が空海という考え方に対しては？

宮家 空海自身は教義的なものと民間宗教者のものを合わせて持っています。民俗宗教から見ると、日本の宗教全体を貫く基調音には、アニミズム的な考え方があります。仏教的には天台本覚論、誰でも成仏できるということになります。

佐野 歴史民俗学的方法では、その基調音がマグマみたいに歴史的規制を受けながらポツと現れる。空海の雑密時代を宗学の人々は評価しませんが、歴史上の空海と伝説上の弘法大師を結ぶところに意味があります。

宮家 修験の受け止め手から見ると大きな流れがあります。平安末から鎌倉時代では安産祈願とか病気直しが大きなウエートを占め、中世後期、戦国時代には、戦勝祈願が中心となり、近世期以降は、山の田楽、農耕儀礼を取り込んで聖なる力を付与した種物を授けるなどしていく。近世末から近代以降になると、逆に民間の人が修験の山に登り利益を受けるようになっていく。

佐野 修験を一括するにはできないということですね。

宮家 時代、地域によって違います。

佐野 明治初年の神仏分離以降、修験という言い方は後退しましたが東北地方では法印さんと呼ばれて生活に密着していた。正月に神棚に上げる餅をフクデといいます

が、由来は福田思想です。仏教の終着地東北では、修験が介在し稲作と結びつき餅となった(笑)

宮家 東北の鎮守とか村の小祠は、七割かた修験が管理していましたからね。関西は必ずしもそうではない。

佐野 連尺巻物も修験関係です。商人の起源も修験で、職人論、網野理論の展開に欠かせません。先生は遠慮されていますが修験道は日本の文化を象徴しているといえませんか。

修験道儀礼の象徴性 シンボリック・アクション

宮家 人間が神の世界と接するときには人語ではなく、しぐさで神に意思を伝える。

佐野 修験の結び印はまさに身体技法ですね。

宮家 護摩を焚くときには全てを印で表現します。はじめ護身法をして自分自身の身を固め、次に護摩壇上に家を作り、ご馳走を準備する。終わると、車を出して神様を招き、供物を差し上げる。その行為をすべて印、指の形で表す。それをシンボリック・アクション、象徴として捉え、絵解きして分析します。

佐野 体全体での自然との一体化の中で、印を結ぶ行為の意味は？

宮家 忍者が大宇宙そのものを示す大日如来の智拳印を結びドロと消える(笑)

佐野 印をはじめ、真言、曼荼羅、符、経典まで非文字から文字まですべての資料が修験道儀礼の中には含まれ、象徴的意味を持つ。仏像としては不動明王ですね。不動といえば火ですが、火と一体化して力を発揮するのですか？

宮家 自身が火になることと、光明をもたらす二つの意味があります。火渡りとか、火を自由に操作する能力の誇示と灯明を献ずるという発想です。

佐野 火の熱さと、明かりという違い…。不動明王の持物、剣と羂索は何を象徴しているのですか？

宮家 剣と索を強調した修験の崇拜対象は、俱利伽羅不動、俱利伽羅竜王です。剣と縄が、魔を伏せる力を象徴している。横綱の土俵入りでも、横綱を巻いて太刀持ちを必ずつける。刑罰ではお縄にして、剣で切る。不動金縛り法は縛る形をとるし、剣印で九字を切る。

佐野 結袈裟など修験自身の持物にも象徴的な意味があるわけですね。

宮家 山伏のコスチューム(図1)は金剛界・胎蔵界を表わし、さらに不動明王、成仏することも表します。自然、宇宙そのものを着込むことになる。日本人の生活の中には、晴れ着に風景を描き自然を取り込む伝統がある。仏教語では、外在的な自然を「しぜん」、内在的には「じねん」という。自然を内在的に取り込み生きていく自然法^{じねんほう}と兩の思想体系が修験道の中には息づいています。

佐野 山中の岩とか滝にもすべて意味がある。

宮家 修験が、洞窟での修行中に岩に仏を見る、断食など厳しい修行の中、意識が朦朧とし、無意識の底に強い仏への祈りがあれば、夢の中に出てくる。高僧伝の夢の中に見る仏ですね。

佐野 修験者は衣服から自然など全てを意味づけて一つの世界を組み立て、その中に自らを置くわけですね。

宮家 山水画を床の間にかけてみる人の心理は、絵の中にぼつんという人の心理に通じる。本来は一人で自然と一体化し、悟りを得る。回峰行した住職さんに身の上相談を頼んだ本人が、山中を一人で歩き到着したときには悩み事は消えていたという(笑)

佐野 熊野系ですと椿が描かれている修験の笈も民具、運搬具として捉えるだけでは不十分で、笈の象徴的意味も考える必要がありますね。

宮家 笈の中に仏像が入っていますから祭壇でもある。羽黒修験は笈自体を母胎と考え、それにかかる班蓋を袍衣とみなし、秋の峰では、自身が仏としての再生するために祈り、その後初めて本尊を拜む。秋の峰は、人間が地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界の修行をし、ホトケとして生まれ変わりますが、非常に象徴性が高い。峰入り前に葬式をし、大梵天を黄金堂の前に投げ出して受胎を表し、その後母胎である山に入る。やがて山から産声を表す大声を上げ下りてくるホトケ(出峰者)を里人は盆の迎え火と同じ火を焚いて迎えるのです。

佐野 笈も山も母胎と考える、象徴物が入れ子状になって濃縮され、ピュアリファイされていく感じを受けます。

宮家 羽黒山の松例祭では、糞製の小さな苦屋「興屋聖」の中に五穀の種を入れ、位上、先途の二人の松聖が100日間祈念する。そしてその従者ともいえる小聖が太陽と月それぞれのシンボルを表わす烏、兎と化して験比べをして勝った松聖が祈念した興屋聖の五穀を種初に混ぜて村人たちに授け、豊穰を約束する。太陽と月が農耕を育むこ

対談

とを象徴的に表わし、日月の力を自由に操作できる修験の力の誇示ともいえます。

佐野 西南中国のイ族のピモはある意味で星の宗教者といえます。天体の星を観相して体系化し、星座を神枝で地上に現し、儀礼を行う。

宮家 北極星が方角の指標となるように不動の星は非常に重視されます。日本では北極星に対する妙見信仰です。修験では人の運命を支配する星を祀る星祭も行っています。

佐野 北斗七星にしても沖縄、朝鮮半島までは司命星ですが、修験者の活動の反映でしょうか、日本本土では厄除けの性格が強いですね。

宮家 秩父神社には妙見信仰がありますが、修験と結びつく可能性はあまり聞きません。

動・植・鉱物と修験 本草の世界

宮家 立木観音、磨崖仏は日本人の自然観を背景にしている。浅草の観音も吉野の本尊も海上で光を発した流木を刻んで作られた。

佐野 アニミズム、万物の霊の意識化、表面化に修験者が介在する。山形県米沢地方の草木供養塔、飯豊朝日山系では狩猟の頭領が山崎伊豆守という修験的獵師でした。獲物に四句の文を授け成仏させる。鮭供養にも修験は関係します。東北の文化は修験道文化の影響が強い。

宮家 熊・蛇・亀、日本で崇められている動物は、冬眠動物が多い。折口流では日本の神は冬期間、山に籠る。一番大切な峰入りは、羽黒山では冬中山に籠って験力を



佐野 賢治
神奈川大学教授・COE事業推進担当者

対談

得た松聖が大晦日に験くらべをする松例祭の形で行われる。このように修験は山の洞穴に籠り験力を増強する。冬眠動物も同様で、神の使いと考えられ、修験はその使いの動物たちを自由に操る。狐使いはそうした一面を持っていると思います。回遊魚の鮭、寄り魚と修験の関係も興味深い。

佐野 修験は本草に詳しく、各地の修験の山には何らかの薬があります。いろいろな方法で身を枯らしていく即身仏の修行はそうした経験的知識が反映していると思います。

宮家 大峰などの陀羅尼助、立山の反魂丹の命名が非常に面白い。陀羅尼は呪文で、反魂丹は体の外に出た魂を呼び戻すという考えです。立山修験に關係する富山の薬売りの源流も配札にあった。即身仏、ミイラの信仰は教義的には弥勒下生信仰ですね。

佐野 丹は水銀化合物、高野山、吉野など修験關係の寺は水銀鉱床の上に立地し、四国の空海開創を伝える寺も鉱脈の上にあるといわれています。

宮家 基本的には、木から煮詰めて作る薬が多いですね。
佐野 求聞持法は鉱山開発法だという説があります。鉱山主が信仰し、鉱夫や運搬業者は聖徳太子を信仰した。全てを宿す種という概念、虚空蔵のガルバ=蔵・胎がキ

図1



と きん 頭襟
か い の お 螺 緒
ひ つ し き 引 敷
す ず かけ 鈴 懸
は し り な わ 走 繩
ひ お お ぎ 檜 扇
ゆ い げ さ 結 袈 裟
ほ ら 法 螺
し ば う か た な や つ め の わ ら し 柴 打 刀
い ら た か ね ん じ ゅ 最 多 角 念 珠
や つ め の わ ら し 八 目 草 鞋
し ゃ く じ ゅ う 錫 杖
て こ う 手 甲

宮家 著『霊山と日本人』(日本放送出版協会、2004年)より。

ーワードです。

宮家 日本人の原風景は「蔵風得水」といわれています。風は気、スピリットですから、アジア的ともいえますが、山の信仰には風を蓄えるという面もあるのではないかと思います。

佐野 仏教学では如来蔵、仏性論が常に論争になっている。民俗では種銭、種柿のように必ず種を残さなければ次が生えない。

宮家 吉野系修験の本尊は蔵王権現で、蔵の王様です(図2)弥勒下生のときに必要な金を守っているといわれている。世界的には宇宙山は金という信仰があります。

ヒコとヒメ 男と女の宗教民俗誌

宮家 男性と女性の宗教者がセットで活動する形がある。修験の場合、憑祈禱ですね。巫女に修験がカミをつける。密教のアビシャ法、伊勢の子良とその父、沖縄のノロ、韓国のムーダンにも痕跡がある。

佐野 憑祈禱も先生が強調された日本のシャーマニズムの特徴ですね。東北の近世社会では山伏と巫女さんは夫婦関係で、生活宗教として人々に密着していた。

宮家 木曾の御岳ですと、男性が男性に憑けますから、一概に男女のコンビとは言えない。天理教教祖の中山みきの時代を契機に巫女が修験から離れ活動する動きがあり、新宗教を生み出していく流れになる。

佐野 先生は、神話のヤマサチヒコとオトヒメ、山と海の関係性を重視されていますね。

宮家 折口流に言えば「海山のあいだ」です。

佐野 山の神には、山と田を行き来する農民型、山の幸をもたらす山人型がありますが、山の神、ヤマヒコはどのような性格ですか。

宮家 先行する山人の山の神は全ての物を生み育む女神の要素を示し、農民の持つ山の神の水神的な信仰に注視する必要があります。最近気になっているのは、境界神としての山の神の祭祀場所です。

佐野 狩獵儀礼で有名な新潟県奥三面では、里の山の神と、奥山の山の神を峻別しています。

宮家 奥山と里山の山の神のセットで氏神鎮守の原型を示しているとの解釈も出来ます。村の中心にある氏神は比較的新しく、村の境界にあるのが古いと思います。

佐野 東北の八ヤマには薬師が祀られ、水と関係が深い。
宮家 峰の薬師ですね。古代から病気治しは大変で、比

対談

叡山の本尊自体が薬師です。山の信仰を考える場合、上からと下からがあります。下から考えると母なる山、上から考えると天孫降臨です。その二つの交点があると思います。

佐野 木でも、根から枝に向かう樹霊信仰と、上から来る依り代的信仰の二系統があります。依り代の代表は松で北方的。楠とか照葉樹林文化では樹霊信仰と地母神崇拜が合わさって、樹母信仰となる、南方的ですね。「女房と山の神」で、民俗学者、千葉徳爾は婚姻制度まで含め山の神がなぜ女性なのかを解説しています。山の神との性的な交渉がキー・ポイントとなります。

宮家 霊山の秘仏には聖天さんが多い。山の女神に抱かれて男が力を獲得するのは、女人禁制と関係します。山で危険な仕事をする人には山の女神に守ってもらっているという意識がある。大峰山の峰入りで力を獲得した男には子授けの霊験があると女性が麓の洞川で待つ習俗があった。それが崩れると女郎屋になっていった。

修験道と現代社会 自然との共生

佐野 自然との共生とか環境保護は、修験道の考え方に繋がりますね。

宮家 最近、中高年の登山が大変流行っていますが、山の自然に触れ、自身の体に自信を持って帰る。個々の山伏の活動ではなく、万人が山に登って再生、生き返った気持ちになる信仰とみなせます。

佐野 熊野・吉野・高野山が世界遺産に登録されました。自然と人間の関係が織り成した修験道を核とした人類文化の遺産といえます。

宮家 それぞれの地域の持っている文化を大事にする考えが必要です。

佐野 ローカルなものがグローバルに評価される。

宮家 グローバリゼーションが広がっていますが、多様性の中で人間は生きている。その一つ一つのものに触れていくのが修験道の考え、一人一人が自分の道を発見していくことになる。それぞれの“道”の中に日本的なものがある。

佐野 道の語は意味深い。

宮家 修験道、華道、茶道、剣道...、すべて宇宙の摂理、道がありその道を人間が歩む、同時に個々人の道がありそれを妨げないかたちで歩んで行く。



図2

蔵王権現立像
(如意輪寺蔵、写真 奈良国立博物館提供)

佐野 修験道は歩く宗教ですね。ランナーズハイという状態がありますが、覚醒を促す歩行があるのですか。

宮家 そこまで修行していないから何ともいえません(笑) 修験は山を歩くときに本来、蓮華を象徴するわらじを履く。土の感触が伝わり、山に身を委ねる感覚が得られる。登山靴とは違います。

佐野 修験の中に、サンカ・マタギなど山人、歩き筋の文化系統を認める考えがありますね。

最後に、このプロジェクトに対する注文、期待がありましたら?

宮家 このテーマはフォークロアの原点です。宗教学の立場から言えば、宗教経験は文字では表せない。文字化との矛盾をいかに克服するかが問題です。体験談を理解した上での理論化、体系化が大事です。研究者が勝手に解釈すると、話者の経験から乖離していく。話者の言葉より、柳田、折口の言葉を優先するようになったらおしまいです。

佐野 修験道のお話はもとより、学問論まで長時間にわたりありがとうございました。

(2005年8月26日 COE共同研究室、記録:長谷川千穂・櫻村賢二)

Sex? Hapana, tume-chill 「非文字」の混合言語、シェン語のVサイン



小馬 徹 (神奈川大学教授 / COE事業推進担当者)

はじめに エイズと戦う「非文字言語」

2001年10月、アフリカ最後の絶対君主、スワジランドのムスワティ3世が若者たちに完全な性的禁欲を命じて世界をアツと言わせた。違反者からは牛一頭分の罰金を取ると宣言したが、1月後に彼自身が9人目の妃(17歳)を得て掟破りを強いてしまう。婦人団体に矛盾を果敢に突かれると渋々罰金を支払った。「隗より始めよ」の伝!

ただ、ムスワティの命令は無理無体だが、徒な伊達・粋狂でも荒唐無稽の高踏でもない。今アフリカではパンデミックが若年層を根絶し兼ねない勢いで荒れ狂い、中でも彼の国は最悪の状況に陥って久しい。王は心底人々を思うものの、如何せん彼は人々の一人ではなく、王なのだ。裸に気づかぬ王様もいれば、纏った衣(掟)を忘れる王もいよう。

一方、民主国家ケニアでは、取られるのは「罰金」の牛ではなくただ命だけだから、禁欲せよと人々が自ら晴朗に合唱している。新聞、雑誌、ラジオ、テレビなど、マスメディアの至る所で幾度となく反エイズ・禁欲キャンペーンに出食わさない日は一日もない。そのシンボルマークが、右側にchillの語を添えた独特のVサインである。

このchillは、「禁欲する」を意味するシェン語の(英語起源の)動詞だ。シェン語は、1990年代半ばにケニアの若者たちの間で急速に台頭した新たな(都市)混合言語で、ケニア憲法の規定ではいかなる範疇にも属さない、未公認の、いわば「存在しない」言語である[小馬 2005: 103]ところが、国家の浮沈を賭けた一大反エイズ・キャンペーンが、公用語の英語でも国家語のスワヒリ語でもなく、このまだ正書法もないストリート言語で繰り広げられている現象は、まさに現代の沸点として刮目に値する。

そこで、シェン語という「非文字言語」(正書法をもたない言語)の沸き立つばかりに旺盛な活力の秘密、即ち超文字的な論理をその独特のVサインを鍵として紹介し、少し立ち入って考察してみたい。

1 クールが最高

シェン語は、東アフリカの混合共通語(lingua franca)

であるバントゥ語系のスワヒリ語を母体(donor)として英文法も盛んに援用し、語彙は両言語を中心にケニアの諸固有語(民族語)からも広く借用のうえ、語形や意味を独特の仕方に変形している[小馬 2004b, 2005]

さて、今回のキャンペーン(便宜的に「ku chill計画」と呼ぼう)は、国際機関の援助を受けてケニア政府が開いているもので、新聞紙上では2004年10月に、テレビでは2005年1月に始められた。最初の新聞広告(図1・表紙)の意匠は、若者たちの群れの最前列にいる男女2人が片手と両手でVサインを示しているもので、最上辺には、Sex? Hapana, tume-chill.、最下辺には、We don't follow the crowd.と、Ni poa ku chill.のキャッチコピー、ならびにシンボルとして「chill付きVサイン」が印刷されている。

とは純然たる英語とシェン語の文、はEng.-Sw.-Sw.-Shng.の内的構成をもつシェン語表現である。は、「セックス?まさか、僕らはクールになったのさ」、は「クールが素敵なんだ」と訳せよう。

2005年には、スクールバスから身を乗り出した男1人・女2人の中学生が各々片手でVサインを作っている意匠の新版(図2)が登場した。文字表記は、では否定詞がスワヒリ語から英語に、では文全体が、We won't be taken for a ride.に置き換えられている。"take a person for a ride"は「人をたぶらかす」、より直接的には「人を車で連れ出して殺す」意味である。このポスターの意匠は、後者のニュアンスをスクールバスのイメージに重ね合わせた発想で、学校、ことに寄宿制の学校が性的放縦の温床になりがちな実情も仄めかして、巧みだ。

一方、テレビではニュース番組の前か途中に同じモチーフの動画を写す。まず色々な学校の生徒がエイズと禁欲に関する問い掛けを受ける場面があり、それから

の順番で音声流れるという趣向である。

2 シェン語は若者のためならず

次に、「ku chill計画」の言語媒体としてシェン語が

選ばれたのは、主要なターゲットが若年世代であり、シェン語が彼らの第一言語(first language:主にそれで思考する言語)だからだと仮定して、検討を加えてみよう。

同じ反エイズ・キャンペーンでも、無料のHIV感染血液検査と感染後のケアの普及を目的とするVCT(Voluntary Counseling and Testing Centres)が実施しているものは(便宜上「chanukeni計画」と呼ぼう)既婚者層を主な対象としている。ところが、そのポスター(図3)も、まさにシェン語の単語が鍵になっているのだ。

そのキャッチコピーは、左上から右下への順で、(a) Onyeshwa Mapenzi Yako(Sw.:あなたの愛を示そう)、(b) "My husband knows I'm HIV positive and we're still together."(Eng.) (c) Chanukeni pamoja(Shng.+Sw.:[夫婦で]一緒に開明[=受検]しよう)である。ここで特に強い印象を与える語がchanuka(本文

では、語尾のaに代えて二人称複数を示す-eniという接尾辞が付いた語形でchanukeni)である。これは純粋なシェン語の造語で、元々は伝統を脱して近代的な暮らしに移行すること(開明)を意味していたが、現在ではHIV検査を受けることが第一義になっていて、代替語のない打って付けの表現として重用されている。

同様の事情は、上の二つのキャンペーンが対象としている二つの世代の中間に位置する、大学生たちの団体が始めたキャンペーンにも見いだせる。

ナイロビ大学の学生たちの一部は、HIV/AIDSの蔓延を抑え止めるべく世人を啓蒙することを目的として、2004年後半にICL(I Choose Life)グループを結成した。彼らは、国際援助団体であるUSAIDとFH(Family Health International)の後援を得て、2005年4月初めに首都ナイロビのメイン・キャンパスで文化祭を催した。



図1 昨年ケニアで、新聞、テレビ、ラジオなどマスメディアを総動員して展開されている、反エイズ=禁欲キャンペーン(「ku chill計画」)ポスターの初版。左下隅に描かれた「chill付きVサイン」に注意。「非文字言語」であるシェン語の独特の論理と表現が窺える。(表紙写真)



「ku chill計画」の最新版ポスター(2005年3月末現在) 図1のキャッチコピーの内、「We don't follow the crowd.」が「We won't be taken for a ride.」に置き換えられている。これは、学校が性的放縦の温床になりがちな実情も仄めかす、巧みな表現だと言える。



既婚者を主なターゲットとする「chanukeni計画」のポスター。「My husband knows I'm HIV positive and we're still together」という惹句が印象的だが、Chanukeni pamoja(夫婦で)一緒に開明[=受検]しようというシェン語表現が鍵になっている。

この催しの宣伝に用いられたポスター〔図4〕と、メンバーが着用したTシャツにはTia zii ni Kuziiというキャッチ・コピーが大書された。ziiは英語のZ、つまりzeeの借用、tiaはスワヒリ語の動詞「入れる」、Tia ziiは全体で「断る」を意味するシェン語。一方、ni kuziiは、上記「ku chill 計画」のキャッチ・コピーの鍵となるku chillに対応する表現で、「クールになる」、つまり「(性的に)禁欲する」を意味している。このkuziiは、Tia ziiと韻を踏むように、同じく英語のZからICLグループが新たに造語したシェン語の動詞である。なおkuは、スワヒリ語、ならびにシェン語の不定詞。

以上から、少なくとも1980年代半ばまではストリート・チルドレンの言葉として卑しめられ、遠からず姿を消すと軽視されてきたシェン語が、今や少年から壮年(前期)までの世代で、しかも大学生などのエリートの間でも、広く第一言語化している事情が窺えるであろう。

3 「chill付きVサイン」の論理

ところで、「ku chill 計画」のシンボル・マークの「chill付きVサイン」は何を意味するのだろうか。

まず、その記号的側面を読み解こう。正書法のないシェン語は大きな自由度をもって文字化される。例えば、ケニア最大の携帯電話通信会社サファリコムが今展開中の拡販キャンペーン(eQUESTING)の宣伝ポスター〔図5〕が、実情の一端を教えてくれる。キャッチ・コピーのI AM

eQUESTING, RU? の中で、「RU?」はAre you?を代用している。これは、米語のメールの略語でしばしばD8がdateを意味するのによく似た事情だと言える。

ケニアでも、CUL8er(See you later.) UR 2 sweet 2 B 4go10.(You are too sweet to be forgotten.) OP U R OK(I hope you are O.K.) W8(wait; weight) H8(height) N(and) 2moro(tomorrow) 2 D(today)などが、メールで頻用されている。ただしこれは、つい最近の携帯電話の急速な普及以前から既に見られた現象だ。それらの略語を、中学生や高校生たちが、教師に隠れて授業中に短かい手紙やメモを回すための隠語的な符丁として用いていたのである。

ここで注目して欲しいのは、2が不定詞"to"、あるいは副詞"too"の代用となる符号であることだ。「ku chill 計画」のシンボル・マークである「chill付きVサイン」におけるVサインの表層の記号的な意図も、伸ばした二本の指で2(two)を表示して、それで英語の不定詞"to"を代用することである。さらに、シェン語の統語法の大きな特徴は、既にお分かりの通り、英語とスワヒリ語の自在なコード変換(code-switching)にある。したがって、英語の不定詞"to"は即座にスワヒリ語の不定詞"ku"に置き代わり得る。すると、「chill付きVサイン」、つまり「to chill」と等価である「Vサイン(=2)+chill」は、結局「ku chill」を表しているのだ。

ただし、これだけでは「chill付きVサイン」の意味を汲

み尽くせず、象徴表現の側面も顧ておく必要がある。

4 Vサインの伝統と遺産

シェン語が1990年代半ばからメディア媒体として急激に台頭した背景には、ケニアにおける政治の自由化、ならびにそれに連動する電波(ことにFM波)の自由化の戦いがあった。独立以来続いたKANU(ケニア・アフリカ人連合)の独裁体制を複数政党制に改めようとするFORD(Forum of Reinstallation of Democracy)の政治運動が、1989年から1990年代初めに盛んだった。実は、Vサイン(より正確には、二本指の腹を相手に向けた示威サイン)がその象徴として用いられたのである。

1990年から1991年末、この運動は一層大きな盛り上がりを見せる。1990年7月7日に、ナイロビ下町の一角カムクンジの露店群が警察の急襲を受けて破壊され、抗議した小商人たちが数人射殺される事件が起きた。これを知って人々が市内数カ所まで決起して警察と政府に反撃を加えると、混乱に乗じた略奪も起きて暴動状態に陥った(サバサバ蜂起)。翌年の7月7日にも同様の騒ぎが起きる。これを受けて、先進工業諸国が援助の前提条件として複数政党制導入の決断を一致して迫った結果、1991年末にケニア憲法が改正され、ついに一党制に終止符が打たれた。

FORD運動では、Vサインの突き出した二本指は一ではないこと、つまり複数(政党)を象徴していた。このFORD運動を成功に導く前段階として、徐々にではあれ、新聞・雑誌から電波放送へと波及した報道の自由の拡大があった。それゆえに、「chill付きVサイン」には、FORD運動の精神の継承、つまり社会の自由と健全性を守る誇りと気概が籠められているのだと言われる。

5 炸裂するシェン語の勢い

1990年代半ば以来のシェン語の勃興を決定的にしたのが、2004年11月末のY-FM局開局だった。この局はそれまでの地域性の強いFM局とは桁違いに強力な電波を発信して、ケニア国境を超えたウガンダ東部やタンザニア北部での受信も可能にした。しかも、若者世代にターゲットを絞って、ニュース、討論、解説などの番組やCMをシェン語で放送したのである。

Y-FMのYが何の頭文字なのか、局は明らかにしていない。ただ、人々はyouthの頭文字だと信じている。いずれにせよ、その成功を目的にしたりした他局は、間もなく同じ営業政策を打ち出して追随したのだった。

さらに、ケニアの二大新聞社、ネーションとスタンダー

ドが、2005年初めにシェン語の惹句を用いて乗用車などの豪華な商品を抽選で買える拡販競争を始めた。これもまた、重要な変化の兆候である。前者はMaisha ni poa(人生は素敵だ)後者はOne thao(一千シリング〔二週間ごとに百人に当たる])と銘打っている。

そうでなくとも、既にナイロビの街の到る所にシェン語の惹句が溢れている。交差点には、Palipo na kraudi mob, kuna firestone(Sw.-Sw.-Shng.-Shng.,SW.-Eng.: Where is a big crowd, there is Firestone)という大看板が掲げられ、弱小スーパーであるUkwalaの買い物袋にも、「BOB for bob, utanunua MOB」(Sw.-Eng.-Sw.,Sw.-Shng.; ちょっとづつ〔お得〕、買えるよもっと)と上手に韻を踏んだ惹句が刷られているという風に。

おわりに シェン語とケニア国家の未来

政府は、若者の心を驚掴みにする表現手段としてシェン語を反エイズ・キャンペーンの言語に選んだ。それは、世の親たちが眉を顰めるのを尻目にあって性的問題を庶民の茶の間に持ち込んだのと同様に、国家の将来を深く憂慮した政府の、止むに止まれぬ英断だっただろう。

親たちのもう一つの苦衷は、連日連夜FMやテレビで放送され、新聞の大紙面にも登場するこのキャンペーンのシェン語が、全国隅々のもっと幼い児童たちの間にも確実に浸透し始めていることにある。

もはや、シェン語の成長発展と普及が後退することはあり得ないだろう。親たちの語学教育上の心配とは裏腹に、このストリートのスワヒリ語、あるいは混合語は、旧世代には宿命的なものに見えた民族アイデンティティの深刻な対立を超えて、ケニア国民としてのアイデンティティを若い世代の間に確実に形成しつつある。

あるいはこれこそが、莫大な数のエイズの犠牲者と引き換えにケニアが今手にしようとしている、かつては夢想だにできなかった、誠に大きな幸運なのかも知れない。

《参考文献》 小馬 徹
 2004a 「maが差した話 スワヒリ語のレッスン」、『言語』33(8):4-5。
 2004b 「ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語 仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議) 2:125-135。
 2005 「グローバル化の中のシェン語 ストリート・スワヒリ語とケニアの国民統合」、梶茂樹・石井淳(編)『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 87-111頁。

図4



ナイロビ大学の学生グループICL(I Choose Life)がUSAIDとFHIの援助で開いた、「反エイズ=禁欲」文化祭のポスター。「tia zii」というシェン語の慣用語と韻を踏むように「ku-zii」という語が新たに創られた。ziiは、英語のZ(zee)からの借用語。

固定式有線電話が普及しなかったケニアの田舎でも、携帯電話は若者の心を即驚掴みにした。最大手の通信サービス会社サファリコムの拡販キャンペーン用ポスター(=パンフレット)裏面でもシェン語を多用。電波の自由化と相携えて、シェン語が全国の若者を単一の文化集団に誘った。

図5





民俗芸能のデジタル化の取り組み

廣田 律子 (神奈川大学教授 / COE事業推進担当者)

COEプログラムの一員として身体技法の調査・分析法の開発と身体技法の比較研究と感性把握の方法論的研究に関わっている。「モーションキャプチャによる東アジアの芸能比較」及び「東アジアの芸能に見出せる除災と招福の感性比較」をテーマとしている。

東アジアの芸能について、客観的なデータを収集する為にモーションキャプチャを使用し、わらび座のデジタルアートファクトリーの長瀬一男氏と海賀孝明氏の全面的協力を得て芸能のデジタル収録を進めている。モーションキャプチャで得られた日本と中国の民俗芸能と伝統芸能のデータから、東アジアの身体技法の特徴を解明しようとしている。

なぜ伝統芸能と民俗芸能かといえば「型」によって身体表現が定型化・様式化された伝統芸能は、上演の場として舞台を意識し、他方いわゆる民俗芸能は、祭儀の場を上演の場とし、神と人が一体となり身体表現が行われる。伝統芸能と民俗芸能の両方のデータを取る必要があると感じたからである。

すでに中国の民俗芸能として石郵村舞の2名の演者と日本の伝統芸能から能の観世流シテ方関根祥人氏、民俗芸能から奥三河花祭りの伊藤勝文氏のデータの収録を終えている。

中国江西省南豊県石郵村の舞は、20年あまり演じている叶根明氏(36歳)と15年あまり演じている唐賢仔氏(35歳)のデータを収録した。収録演目は『開山』『紙銭』『雷公』『儂公儂婆』『酔酒・酒壺仔』『跳橈』『雙伯郎』『関公祭刀』の8演目全てを収録し、叶根明氏は33テイク、唐賢仔氏は17テイクに及び、データの総量は1ギガバイトに達した。最後に囃子の収録を行なった。

能楽は、観世流シテ方で、2歳の時『老松』で初舞台を踏みすでに芸歴44年になり、今年26回松尾芸能賞を受賞した関根祥人氏(46歳)のデータを収録した。収録した演目は『遊行柳』『百萬』『養老』『敦盛』『猩々(乱)』『熊坂』『石橋』で、これらの演目は、関根氏と相談の上、シテの人体による分類から老人、鬼、神、男、女を、演能

技法及び番組から序舞物、修羅物、切能物、四番目物、脇能物を網羅し収録を行った。

奥三河花祭りは、5歳の時『花の舞』を務めすでに65年近くも演じ、長として花祭りの継承に寄与している伊藤勝文氏(70歳)のデータを収録した。収録内容は、『神鬼』『湯囃子』『翁の舞』『剣の舞』『おつるひやら』、そして基本動作として「ちふひ」「ためな」「かぶり」「はんや」「いりまい」「いもこじ」「つうふ」「こびき」「ざがわり」である。

わらび座デジタルアートファクトリーの協力を得て行っている収録からデータ活用までのプロセスだが、収録では、FILMBOXを用いてリアルタイムで収録し、収録後直ちにプレイバックし収録データの確認を行う。11点における空間(3次元)での位置(x, y, z)方向(x, y, z)の数値データが得られる。次にポスト処理では、ノイズ等の除去を行い、映像収録を見ながら、目的により修正を行う。

次にCGアニメーション制作及びデータ解析、研究段階へと進む。まず動作データを視覚化する方法として、あらかじめ製作された人体の骨格モデルに動作データを反映させ、動作の調整を行い、人体骨格の動作データを作成する。また、動作の評価比較を行う為動作データをグラフ化する。更に分かりやすくする為にキャラクターに人体骨格の動作データを組み込み、キャラクターCGの作成を行う。これによりあらゆる視点から見る事ができ、動作の誇張表現も部位の省略も可能で、CGを用いた新しい視覚評価方法といえる。この際衣装や顔の表情などの情報を極力排し、人体の動きを見やすくしている。

今までのところ中国の民俗芸能の石郵村舞の『雷公』を分析する事で 民俗芸能が連続するパターンから構成されている事 東西南北中央が意識されている事 回転跳躍はその軸足と回転方向に規則性が見られ、これは巫女舞等に共通すると考えられる事 演者の個性が明確に出る事等を見出せた。また日本の伝統芸能の能の『石橋』との比較では、跳躍時に右足を軸にして左膝を曲げ腿を

引き上げる事等に共通点がみられる事が分かった。能は回転の方向や軸足に規則性は見出せず、より複雑な構成となっている事が分かった。

先に分析をした『雷公』は演者となって初めての祭りの前の15日間位で覚えてしまう覚えやすい演目とされる。分析の中の にあげた回転・跳躍はその軸足と回転方向に規則性が見られるという点について、少し説明を加える。

『雷公』はパターンの繰り返しで構成されている。中でもその回転方向は時計の回転方向を順として、逆・順・順・逆・順・順が規則的に繰り返され、軸足も右・左・左・右・左・右と規則的に変化する。これは日本の巫女舞に共通している。跳躍は跳躍時に膝を曲げ、腿を高く引き上げた跳躍の方法を取り、これは能の『石橋』にも共通するアジア的跳躍であるといえる。

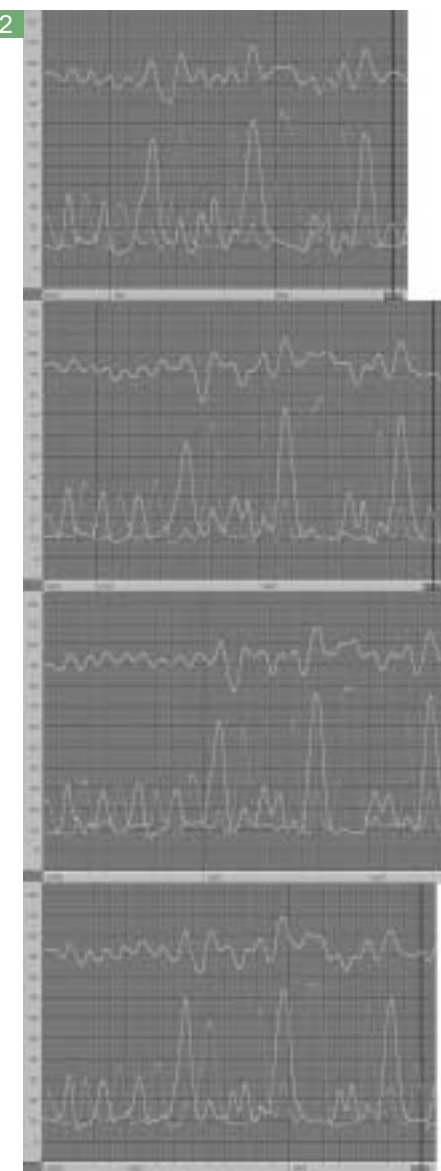
すでに6月に中国江西省で開催の国際舞文化研究会及び7月にお茶の水女子大学比較日本学研究中心主催の比較日本学の試みにおいて研究発表を行った。

引き続き分析を進める事で、東アジアの芸能の特徴が明らかになるであろう。そして芸能間を比較する方法の開発も可能となると考える。

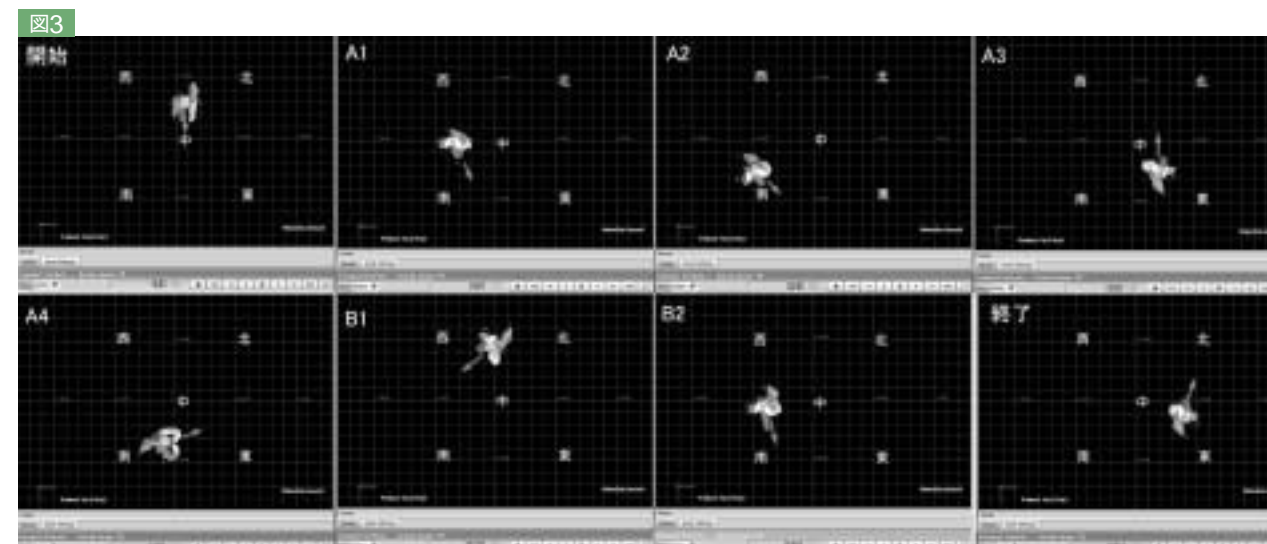
研究において調査研究協力者の岡本浩一氏を中心となり分析にあたった事をつけ加える。



『熊坂』収録時の関根祥人氏



『雷公』のパターングラフ



CGモデルによる方角の確認画像(『雷公』)



平安時代の和歌と呪術

繁田 信一 (神奈川大学非常勤講師)



和歌というのは、わが国の文化の重要な要素の一つであるが、その和歌が最も発達したのは、平安時代の中期から後期にかけてであった。『古今和歌集』『新古今和歌集』を含む八つの重要な勅撰和歌集(「八代集」と総称される)が誕生したのも、その頃のことである。「平安時代」という言葉から即座に「和歌」という言葉を連想するのも、われわれ日本人には普通のことであろう。

その一方で、現代の日本人がイメージする平安時代は、呪術の時代でもあるように思われる。というのも、平安時代の人物として現代人の関心の対象となるのが、往々にして密教僧の空海や陰陽師の安倍晴明といった呪術の専門家たちだからである。しかも、平安時代というのは、拙著『平安貴族と陰陽師』(吉川弘文館 2005年)においてもその具体的な様相の一端に触れたように、実際に密教僧や陰陽師による呪術が隆盛を迎えた時代であった。

そして、一見ただけでは全く関係のなさそうな和歌と呪術とが、平安時代においては、非常に深い関係を持つことがあった。実は、平安時代の人々は、和歌を以て呪術を行うことがあったのである。それは、平安時代には呪術のために和歌が使われたということに他ならない。

平安時代の貴族社会についての百科全書として知られる『二中歴』は、さまざまな事柄に関するリスト(「歴」)の集合体であるが、以前に拙稿「呪文を唱える平安貴族」(『国文学』第50巻4号 学燈社 2005年)でも触れたように、『二中歴』を構成するリスト群の一つである「呪術歴」には、平安時代に実際に行われていたと思しき三十四種類の呪術が列挙されている。そして、その三十四種のうちの八種までが、次に引くa~iの和歌を呪文として

c からくに 唐国^かの 苑^{その}の御嶽^みに 鳴^なく鹿^{しか}も
違^{ちが}へをすれば 許^{ゆる}されにけり

d ししむし 志^し々虫^{むし}は ここにはな鳴^なきそ 唐母^{からは}が
死^しにし塚^{つか}戸^とに 行^ゆきて鳴^なきをれ

e よみどり 黄泉^よつ鳥^{どり} わが垣^{かきもと}下に 鳴^なきつれど
人^{ひと}しな聞^ききつ 行^ゆく魂^{たま}もあらし

f たまみ 魂^{たま}は見^みつ 主^{ぬし}は誰^{たれ}とも 知^しらねども
結^{むす}び止^{とど}めつ 下^{した}前^{がへ}の棲^{すま}

g ふなどさえ 岐^ふ塞^な 夕^ゆ占^ふの神^{かみ}に 物^{もの}問^とはば
道^{みち}往^ゆく人^{ひと}よ 占^う正^{まさ}にせよ

h しらなみ 白^{しら}波^{なみ}を 筑^{つく}紫^しの君^{きみ}の 見^みつ門^{かど}に
繫^{つな}ぐ我^わが馬^{むま} 誰^{たれ}か拐^{かど}らむ

i しおやま 塩^し山^{おやま}に 塩^し塚^{おやま}作^{つく}る 塩^し縄^{なわ}に
我^わが馬^{むま}繫^{つな}ぐ 馬^{むま}の腹^{はら}止^やむ

唱える呪術であった(『二中歴』第九呪術歴)

なお、編者不明の『二中歴』が成立したのは、鎌倉時代中期のことだが、その原型となったのは、平安時代後期に三善為康という文章家が編んだ『掌中歴』および『懐中歴』である。とすれば、『二中歴』の「呪術歴」に見える上掲の九首の和歌は、やはり、平安時代の貴族層の間で知られていたものに違いない。

aの歌は、『二中歴』においては、「沐浴する時に鐘を聞くの誦」として紹介されるのみで、それ以上の説明を加えられてはいない。「『宵の鐘を撞く以前に沐浴を済ませなさい」と、あれほど何度も言ったのに」という歌意からすると、平安時代には夜間の沐浴は何か悪い結果をもたらす行為と見做されていたのだろう。そこで、当時の人々は、図らずも沐浴中に夜を迎えてしまった(宵の

a よい 宵^よの鐘^{かね} 撞^つかざる前^{さき}に 浴^あみよとは
耳^{みみ}とまなくに 言^いひてしものを

b かた 難^{かた}し早^{はや} 会^あが弄^せりに 醸^かめる酒^{さけ}
手^て酔^よひ足^{あし}酔^よひ 我^{われ}酔^よひにけり

鐘を聞くことになった)場合には、aの和歌を口吟むことで危機を回避しようとしたのではないだろうか。

bの歌の意味は、「あり得ないほどに早いことに、会合の座興に醸した酒のせいで、手も足も酔って、私は酔っ払ってしまった」といったところであろう。これを『二中歴』が「百鬼夜行の途に中るの誦」としているところを見ると、平安時代の人々は、酔っ払いは百鬼夜行に遭遇しても無事でいられると考えていたのかもしれない。

cの一首は、『二中歴』によれば、「悪しく夢想する時の誦」である。今のところ、「唐国の苑の御嶽で鳴く鹿も、夢違をすれば許されたものだ」という歌意を詳細に理解することはできないが、この歌において重要なのは、悪夢を正夢としないための「夢違」を意味する「違へ」という言葉が使われていることであろう。

dの歌を『二中歴』は「志々虫の鳴く時の誦」として扱うが、「志々虫」がどのような虫なのかは不明である。だが、「志々虫はここでは鳴いてくれるな。唐母が葬られた塚戸に行って鳴いている」という歌意からすると、「志々虫」の鳴き声は死と関連づけられていたのだろうか。あるいは、「志々虫」は「死々虫」なのかもしれない。なお、『二中歴』は「一に云はく」として「志々虫よ/いたくな鳴きそ/唐人の/死にし塚瀬に/行きて鳴きをれ」という一首をも紹介する。

eの歌意は「黄泉の国から来た鳥よ、私の家の垣内で鳴いたところで、誰も聞きはしないから、お前とともに黄泉の国に行く亡魂はないだろうよ」といったところであろうか。これは、『二中歴』では「鶴の鳴く時の誦」として扱われる歌であり、おそらくは、鶴の鳴き声が聞こえたときに死者が出るのを防ぐために口吟まれたのであろう。とすると、平安時代の人々は、鶴の鳴き声が死をもたらすと考えていたことになる。

fの一首は「人魂を見る時の誦」であり、『二中歴』には「此の歌を誦して、着る所の衣の端を結びと云々」という注記が付されている。要するに、人魂を見かけた場合には、fの歌を口吟んだうえで着物の左右の裾の端と端とを結び合わせればよかったのである。そして、「人魂を見たので、それが誰の魂であるかはわからなかったけれど、着物の裾を結び合わせたよ」というfの歌意は、きちんと注記の内容に合致している。

gの歌の意味は、「岐の神や塞の神といった夕占の神に尋ねたいことがあるときには、往来を通る人よ、よい結果が占われるようにしてくれ」といったところであろう。この一首は、他のもののように何らかの危機を回避する

ために口吟まれる呪文ではなく、何かの吉凶を占うために使われる呪文であった。これを『二中歴』は「夕食を問ふ時の誦」とするが、やはり、「夕占を問ふ時の誦」とするのが正しいのだろう。また、『二中歴』の「説きて云はく、『三度此の歌を誦して、堺を作り米を散じ、櫛の歯を鳴らすこと三。後に堺の内に来たる人、若しくは屋の内の人、言ふ語を聞いて、吉凶を知れ』と」という長い注記は、「夕占」の具体的な方法を教えてくれている。

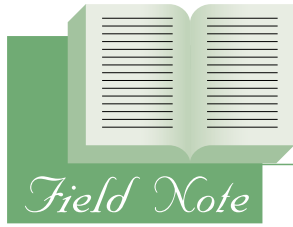
hおよびiは、『二中歴』が「馬の腹を病む時の誦」として紹介する歌である。『二中歴』によれば、まずhの一首は「馬の左の耳の中に三遍之を誦して、人に聞かめず。即ち馬を東に向けて三遍牽き廻して腹を踏むと云々」というかたちで用いられ、iの一首は「即ち腹を踏みらば炙きて三遍誦して曰く」というように口吟まれることになっていた。そして、一対で使われたhおよびiの歌意は、それぞれ「筑紫の君が白波を見た門に繫いだ私の馬を、いったい誰が盗むだろうか」「塩山に塩塚を作るための塩縄に私の馬を繫げば、馬の下痢は止まるだろう」と解することができようか。

すでに拙稿「呪文を唱える平安貴族」において確認した如く、『二中歴』の「呪術歴」に列挙された呪術というのは、密教僧や陰陽師のような呪術の専門家の手を必要としない、素人向けの呪術である。つまり、以上に紹介してきた和歌を呪文とする呪術は、呪術に関しては素人に過ぎない一般の人々によって行われていたのである。

とすると、平安時代において、こうした呪術を行ったのは、必ずしも貴族層の人々ばかりではなかっただろう。ほとんど和歌を口吟むだけの簡便な呪術であるだけに、当時は庶民層の人々も頻りに行っていたに違いない。

どうかすると、「馬の腹を病む時の誦」としてhおよびiの和歌を口吟む呪術あたりは、本来、庶民層の間で行われていたものなのかもしれない。これを貴族層が自ら行っていたとは考えにくいのである。そして、当時の庶民層の人々は、『二中歴』に見えるよりもはるかに多くの和歌を、呪文として用いていたのではないだろうか。

しかし、平安時代に庶民層の人々のみが呪文として口吟んだ和歌ともなると、何らかの文字資料に収録されて現代に伝わっていることは、まず期待できそうにない。したがって、そうしたものを見付け出そうと思うならば、今後、さまざまな非文字資料にあたっていくことも不可欠であろう。



古代地域史研究と出土史料 「加賀郡勝示札」の史料性格

前田 禎彦（神奈川大学専任講師 / COE共同研究員）

歴史の研究をしていると、常にフィールドに出て文書調査にあたるのが当たり前と思われがちであるが、私のように古代史を専攻している場合には少しばかり事情が異なる。第一に、その他の時代と比べて古代史の史料はきわめて少ない。しかも、その史料のほとんどは現在しかるべき機関に所蔵されており、研究者といえども容易に接することができないケースも多い。いきおい日常利用する史料は刊本や写真版が中心となる。第二に、古代史の史料は中央政府が作成した典籍・文書がほとんどで著しく中央に偏している。近年、古代史の分野においても地域に根ざした歴史を構築する動きがみられるが、その試みは初めから以上のような困難を背負わされている。それでも研究は着々と進展しつつあるのが現状であると思うが、その際、重要な役割を果たすのが発掘にともなって出土する木簡などの文字史料である。最近では地方の出土史料をめぐる研究の発展はめざましく、古代史専攻とは言え、平安時代の平安京社会の問題を主に扱う門外漢の私が口を出す余地はほとんど無きに等しいが、ここでは発掘時の現地説明会に参加して、たまたま実見する機会があった石川県河北郡津幡町の加茂遺跡から出土したいわゆる「加賀郡勝示札」の史料性格について若干思うところを述べてみたい。

加茂遺跡（石川県河北郡津幡町）は能登半島のいわば根っこにある河北潟東岸の丘陵裾部、旧国名で言えば加賀・能登・越中三国の結節点にあたる交通の要衝に位置する。このあたりは石川県でも有数の遺跡密集地帯で、加茂遺跡も弥生時代から室町時代まで断続的に営まれているが、そのうち古代の主要遺構としては古代北陸道の道路遺構、大溝、40棟以上の掘立柱建物、井戸などが確認されている。出土した「加賀郡勝示札」に「深見村」と見えることから、北陸道に設けられた「深見駅」関連遺跡かとも考えられている。

この遺跡の中を走る古代北陸道の西側溝に直交する平安時代前期の大溝から、多量の墨書土器・木製食器などととも一枚の木簡が出土したのは2000年6月のことで

あった。当時、重要な発見として新聞などでかなり大きく扱われたのでご記憶の方もあるだろう。出土した木簡は上・下端部を欠く縦23.3センチ、横61.3センチの長方形のヒノキ材で、表面の墨色はほとんど失われていたが、字画部分が盛り上がっていたため判読は可能であった。そして解読の結果、この木簡が、平安時代前期、9世紀の嘉祥年間(848～851)に加賀郡司が郡内の深見村の有力者に宛てて出した命令書を路傍に掲示し、民衆に伝達した「勝示札」であることが明らかになったのである。

「勝示札」の内容は 差出と宛所、 事書(命令の要約)、 8か条の禁制、 加賀国符の引用、 加賀郡符の本文、 加賀郡司の署名、 年月日、 受領者の署名の8部分からなる。「勝示札」全体は嘉祥2年(848)2月12日加賀郡符(加賀郡司の命令書)という様式をとるが、中心になるのは郡符が引用する正月28日加賀国符(加賀国司の命令書)の部分である。注目されたのは国司が命じた8か条の禁制内容であった。酒に酔って乱暴におよぶ者を処罰すること(第7条) 本籍地から浮浪・逃亡して村内に隠れ住む者を摘発すること(第5条)など村内秩序の維持に関わる決まりとともに、農民は午前4時から午後8時まで農作業に従事すること(第1条) 皆で溝・堰の造成・修理にあたること(第3条) 5月30日以前に田植えを終えること(第4条)など百姓の農業生産、いわゆる勤農に関わる事項が並べられている。江戸時代に農民に対して出されたと言われる「慶安のお触書」にならって、この「勝示札」を「古代のお触れ書き」と称する所以である。

さて、以上が「加賀郡勝示札」の概要である。今後も内容の検討は進むであろうが、実は「勝示札」全体の史料性格をどう理解するかという最も基本的な点で現在二つの異なる見解がある。一つは、中央政府が下した太政官符(太政官の命令書)の内容を加賀国司が国符として加賀郡司に下し、これを加賀郡司が部内に伝達したものであるとする理解。したがって、当然のことながら、同様の「勝示札」が全国のあちこちで掲示されていたことになる。これに対して、いま一つは新任の加賀国司が

着任に際して下した儀礼的な国符を加賀郡司が部内に伝達したものである。つまり、「勝示札」の中心となる加賀国符の内容が太政官からの命令による全国的なものなのか、加賀国司の意思にもとづく一国内に限定されたものなのかについて理解の違いがあるのである。

まず前者の見解について。確かに、禁制内容は百姓への訓戒や勤農に関する一般的な事柄が中心で、加賀国固有の問題を扱った具体的なものではない。しかし、既に指摘があるように、太政官符にもとづき国符が発給される場合、その国符は何時出された太政官符によるのかを明示するのが原則である。したがって、太政官符の引用を欠くこの加賀国符が全国に出された太政官符にもとづき作成されたという理解が成り立つ余地は全くないと断言できる。

いっぽう後者は、平安時代中期に新任国司が赴任に先立って京都から現地の役人に下す新司宣という文書との内容の類似を指摘した上で、この加賀国符は、赴任した新任国司が国内に対して最初に下す儀礼的な国符、いわば施政方針のようなものであったと解釈する。新司宣に対する着目は卓見で、このように理解すれば国符が一般的な事柄を内容とするわけも難しく理解できる。基本的に私もこの解釈が妥当だと考えるが、しかし弱点がないわけではない。というのも、残念ながら国符の出された嘉祥2年の時点における加賀国司の任命を目下のところ史料上は確認できないからである。とすれば、新任時に限らず、こうした国符が毎年出ている可能性も考慮する必要があるのではなかろうか。

加賀国符の出された正月末という時点で注目してみよう。古代・中世の農事暦によると、正月は神事の月で農民たちは田遊びなど予祝のための神事や儀礼に明け暮れるが、2月になると荒田打ち(田起こし)や苗代作り、さらに用水の整備など具体的な農作業が始まることになる。つまり、2月は農作業が本格的に始まる勤農の季節に当たるのである。その2月に先立って一国の支配を委ねられた国司が百姓に農作業のための心得を教え諭したのが、この国符だったのではなかろうか。朝から晩まで農作業に勤しみ、5月30日までに田植えを終えよとの趣旨をもつ国符の内容は任初以上に年頭にこそふさわしい。今後、新史料の出現や釈文・解釈の見直しによって新任国司の下した新制とみる理解が結局は正しかったとなる可能性も大きい。今のところ国司が下す毎年恒例の国符、いわば年頭教書のようなものであった可能性も捨て切れないというのが私の見解である。

「加賀郡勝示札」の出された9世紀は「良吏」と呼ばれる国司たちが地方政治の刷新に大いに力を振るった時代として知られている。そこでは国司の主要な任務として民生を安定させ、百姓の農業生産を発展させるための勤農行為が重視されたのだが、「加賀郡勝示札」は、そうした国司の勤農行為の重要性を端的に示す史料として、これまでにない大きな価値を有している。この史料によって、9世紀の地方政治における国司の役割や地方社会の状況を考えるより具体的な手がかりが得られたと思う。

また、新任時のものか毎年恒例のものか、いずれにせよ2月に勤農のための「勝示札」が出されていることから、もう一つの興味深い問題が浮かび上がってくる。それは、なぜ正月の除目で国司が任命されるのかということだ。平安時代の除目(官吏の任命)は秋と春の二度行われ、前者は京官除目といい主に中央官司の官人が任命され、後者は外官除目といい主に地方官、すなわち国司が任命される。なぜ春正月の除目が国司を対象とするのか、これまでその理由を明確に述べた見解はたぶんないと思うが、これも国司の勤農行為との関わりで理解できるのではなかろうか。すなわち、律令国家の理念では新年の始まりである正月に任命された国司がただちに任地に赴き、農作業が本格的に始まる2月に勤農を実施するという農事暦に見あった行政のサイクルが存在していたのではなかろうか。ここに農業を基盤として成立した律令国家の基本的あり方がうかがえるように思う。もっとも、この理解についてはなお検討の余地があり、ことさらに主張するつもりはないが、一つの解釈の可能性としてご叱正を仰ぎたいと思う。

以上、『非文字資料研究』にふさわしくない文字史料の解釈に終始してしまっただが、日頃、考えてはいても、これまで書くには至らなかった思いつきを気軽に書かせていただいた。考察としては不十分なものに過ぎないが、ご参照いただければ幸いです。

参考文献

- 平川南監修、(財)石川県埋蔵文化財センター編『発見! 古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』(大修館書店)2001年
- 藤井一二「加茂遺跡出土「勝示札」の発令と宛先」(『砺波散村地域研究所研究紀要』18)2001年
- 鈴木景二「加賀郡勝示札と在地社会」(『歴史評論』643)2003年
- 三上喜孝「『平安時代のお触れ書き』を読む」(『歴史と地理』575)2004年



海外博物館事情



コンゴ国立美術館研究所(IMNC)

ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ
(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)

はじめに

コンゴ民主共和国(旧ザイール)における考古学・民族学分野で主要な美術館は、キンシャサ国立美術館と、ルブンバシ国立美術館である。以下にこれらの特徴と歴史の変遷を簡略に述べる。本報告は、(一人のコンゴ人としての)個人的な見聞と自分なりに行ったウェブ検索、2005年5月から9月にかけて実施した現地でのインタビュー調査に基づいている。

1 キンシャサ国立美術館

キンシャサ国立美術館研究所は1970年に、大統領令で、テルブレンのベルギー美術館と一対のものとして創設されたが、1975年からは、カトリック修道士のベルギー人、ジョーゼフ・オルレアン・コルネによって運営されている。彼は、現代アートと黒人芸術の研究に人生を捧げた人である。はじめは、キンシャサのボザールアカデミーで働き、次第に伝統工芸品の価値に目覚め、その保管に努めるようになった。キンシャサ国立美術館の研究所は、ナイル河ならびにコンゴ河流域のコレクションを収蔵している。そのコレクションは、アフリカのサハラ砂漠以南で最大なものの一つである。そこにはコルネによって一覧表に書き込まれ、カードに記載され、分類、整理された3万5千点以上の作品がある。現在、キンシャサ国立美術館は、コンゴの社会、文化的な価値の集大成とも言える6万点余りの作品を収蔵している。

キンシャサ国立美術館はいくつものセクションに分かれている。現代アートの部屋では、コンゴのそれぞれの地方、民族集団が、特有の線描や意匠や技術によって特徴づけられていることに気付く。幾つかの作品は、世界で最も権威ある美術館関係者からも絶賛されるほどである。音楽学の作品の部屋では、コンゴの伝統音楽のコレクションが全て記録されて保管されている。この部屋の責任者であるマイエンバ女史によれば、現在1,033もの伝統音楽を収録したテープが、部屋のいくつもの棚に納められている。

オリジナルの民族芸術作品が保管されている部屋には、コンゴの様々な民族の武器、陶器、壺、持参金となるもの、葬儀の仮面などが置かれている。考古学の収蔵物の部屋には、例えば、故モブツ・セセ・セコ元帥の豹の毛皮を張り、金メッキを施した二脚の椅子がある。15世紀にコンゴ河河口域にやって来た白人がもたらした陶器や花瓶、さらには国内の発掘調査で見つかった中生代ジュラ紀の化石などが展示されている。

キンシャサ国立美術館研究所長のヌカンザ氏によると、現在直面している問題は、これらの作品の保管にあるという。収蔵品は高温多湿な気候条件によってしばしばダメージを受けているからだ。美術館はさらに、深刻な事態にも直面した。最たるものは、1997年5月17日、ローレン・デジレ・カピラの部隊がキンシャサに侵攻したその日に起こった略奪である。何百もの展示作品が盗まれ、それらは1,500点にも及ぶ。

2 ルブンバシ国立美術館

(a)1937年から1960年

ルブンバシ国立美術館は、コミュニテイと美術館が共存する良い例である。1936年にカタンガにやってきた、ベルギーのリエージュ大学の考古学博士、フランシス・カブは、翌年、道義的な義務を果たすために1936・37年の最初の考古学調査の成果を展示した。これがルブンバシ国立美術館の誕生に繋がったのである。考古学者である派遣団のメンバーたちは、年が経つにつれて、民族学など他の研究分野にも興味をもつようになり、その結果コレクションの種類は増え多様になった。

(b)1960年から1970年

エリザベスビル(現ルブンバシ)の独立後の権力者は、当地にこの美術館の新しい建物を作ることを決めた。1961年に再建に至ったが、すぐに新たな戦争が始まった。美術館は国際連合の部隊によって兵舎に徴用されるという大きな惨禍に見舞われたのだ。しかしながら美術館のスタッフは、鉱業のさかんな地方であるキプシのキボボに、一

部のコレクションを移管させ壊滅から救うことができた。

1963年に戦争は終わり、コレクションはキボボから持ち帰られ、再び元の美術館に戻った。再開されたこの美術館は、カタンガ地方美術館と命名され、ベルギー国籍をもつロジェ・ド・ポエルクが保管責任者となった。ド・ポエルクの尽力により、1967年、(とりわけ美術館愛好者に支えられて)民族誌学に捧げられた二つの展示室の開設に成功した。その後、美術館は伸び悩みの時を迎えた。

(c)1970年から現在

1970年、ベルギー国籍のギー・ド・ブラエンの管理のもとでルブンバシ国立美術館は、コンゴ国立美術館研究所(Institute of the National Museums of the Congo, IMNC)の一翼を担っている各地域の主要な美術館のコレクションのストックを移管させていた。それらは、首都キンシャサ、南部のルブンバシ、中央部のカナンガ、北西部のムバンダカ、東部のブテンボである。略奪された国のコレクションを復元するのが、IMNCの大きな目標であった。しかし、IMNCは、1970年から75年の間は共和国大統領の保護下にはなかった。ただ、相当数の人材と物的資源には恵まれていた。

1972年から1977年の間、ルブンバシ国立美術館にはかなりの資金が投じられ、特に屋根などの大掛かりな修復工事も行われた。考古学の発掘のキャンペーンも何回も繰り返された。民族誌学上の資料の収集も数多く実現し、保存されていたものも幾分なりとも正確に修復された。こうして結局、5つの展示室が公開された。二つは考古学に、別の二つは民族誌学に、もう一つは昆虫学に捧げられたのである。だが、1978年より、援助金が減少したばかりでなく、ほぼ底をついた。しかしながら、収集や発掘のキャンペーンのおかげで、ルブンバシ国立美術館に文化的、芸術的、歴史的な作品のコレクションが揃うに至った。定期的に展示が行われると、興味をもつ人々も徐々に増えていった。

コンゴ民主共和国の南に位置し、ザンビアの国境からほんの数キロ離れただけのルブンバシの町は、国家の独立の際にとりわけ危険な場所であった。独立に伴う混乱は、国の文化の保護と保存の分野に大きく跳ね返ってきた。1986年の9月、ギー・ド・ブラエンの後継者となったスタッフが、優先するべき3つの事項と挙げたのは、コレクションの保護、建物の修復、訪問客数の維持であった。

おわりに

IMNCはコンゴ民主共和国の歴史を読み直す上で、見

逃すことができない情報源である。そう考えると、まず、観光施設として育成して、豊かな文化遺産を持っているこの国の他の観光施設の活性化に向けて支援し、その価値を高める必要がある。キンシャサとルブンバシの町の文化中枢における美術館の多様な活動は、美術館と町の共存の中で、出会い、考える場を提供している。



ルブンバシ国立美術館の建物外観とその展示の様子。



ベンデ族のミンガンジ・民俗舞踊家の礼服 (キンシャサ国立美術館)

研究会報告

W O R K S H O P R E P O R T

祓い儀礼から見た呉越神歌の文化史的意義

顧 希佳（杭州師範学院教授）

1 祓除とは中国古代に災難や邪気をはらうために行われた儀式である。一説によると、一般的に年初に宗廟や社壇で、3月には水辺で行われたと考えられている。『周礼・春官・女巫』に、「歳時に祓除衅浴を掌る」とあり、鄭玄の注に、「歳時の祓除は、当今の三月上巳（旧暦三月三日、三月上旬の巳の日）の水上の類のようなものである」とある。祓除は“禊”とも呼ばれ、一般的に春と秋に水辺で行われた。春秋時代の祓除は、行われた時間・場所・方式がそれぞれ異なり、状況は比較的複雑で、火を焚くことや香をたいて沐浴すること、いけにえの血を体に塗ることなどはどれも災いをはらうことができると考えられていた。古代には“衅”という儀礼があり、人または動物の血を大小さまざまな器物や建物に塗るというものである。これも災難や邪気をはらうものであり、祓除と相当近いものであった。さらに“讎”という儀礼も同様に一種のはらいの巫術であり、その巫術によってはらうものは、その当時の人々に対して有害な事物であった。これらによってはらわれるものというのは、初めはとても曖昧模糊とした、例えば“陰気”や“晦気”といった実体のないものであった。後にだんだんと明確なものになっていき、一般には“疫鬼”、つまり人類に災難や病気をもたらす妖魔鬼怪をさすものになり、後に“瘟神”と呼ばれるようになった。つまり、祓除・禊・衅・讎はみな中国古代の儀式行為であり、それらの核となっていたのは巫術信仰であって、その主な目的は、災難・病気・不運・禍害など人に害のあるものをはらうことであった。後にそれらは広く心を浄化させることをさす意味を派生させるようになっていった。（省略）

2 中国の呉越地方では、太湖流域を中心として、歴史上非常に特色ある民間文化現象が存在した。その大きな特徴は、歌手（巫師）がある儀式を執り行い、人々のために疫鬼をはらい、福と加護を求めるといったものである。この儀式の基本的な構成は“請神 酬神 送神”である。儀式ではたくさんの神々を祭らねばならず、これらの神々によって構成される神譜は、ただ単純に仏教や

道教のみで構成されるのではなく、仏・道・巫の三教が合わさった、比較的複雑な民間宗教の形態を呈している。通常この儀式は寺院や廟、道観などでは行われず、一般的には家の中、あるいは祠堂の中や田野・庭などで行われる。またこれは一戸の家で行っても、数戸から数十戸の家が共同で行ってもよく、家単位でも村落単位でも行われる。儀式の時間は、短ければ数時間から1日、長ければ三日三晩から五日間ないし七日間かけて行われる。この儀式の中間部分である“酬神”は、入念に線香やろうそく、供え物などを用意する他に、神々の前で様々な民間芸能を演じることを特に重視する。演じる形式はとても多く、決して各地一律ではない。歌・舞・説唱・戯曲・雑技・武術・民間工芸美術など様々で、一般的にはやはり歌を主とする。民間でこの種の習俗に対する呼称も様々で、例えば神歌・賛神歌・騒子・太保書・童子会・唱霊経・夫人詞などと呼ばれているが、比較的多くの地域で神歌と呼ばれている。この儀式を執り行う人は、和尚や道士といった宗教職業者ではなく、半職業または非職業的に迷信活動に従事している人である。彼らは能弁でその地域の文化に精通しており、特に歌に非常に秀でていて、“神歌先生”と呼ぶ地域が多い。我々は“神歌手”と呼ぶが、彼らは事実上この種の民間文化の伝承者となっている。彼らが儀式の中で演じる内容は、多くは手書きの抄本の形で伝承される。平時はそれを読んで覚えることができるが、儀式の中では暗記していなければならず、抄本を見ながら演じることはできない。

筆者はこの民間文化を“呉越神歌”と呼び、長期間にわたって調査を行った。筆者はこの呉越神歌は中国巫文化が後世に伝承されていく中で形成されていった重要な支脈の一つであると考え。（以下、薩満文化、讎文化と呉越神歌を比較した一文が続くが、省略。）この方面に関する状況については、拙著『祭壇古歌与中国文化』（人民出版社、2000年）をご参照いただきたい。

3（呉越神歌と祓い習俗との一般的な関係について述べた文章があるが、省略。）

呉越神歌の中で、我々は“送龍舟”の行事をよく目にする。儀式が“送神”の段階に入ったときに、神歌手が凶神を送る方法と、正神・善神を送る方法とは異なっている。神歌手が後者を送るときには、普通“送神歌”を歌い、神碼を焼いて礼拝などをする。そして前者を送るときには、凶神の神碼を祭壇からはずし、あらかじめ作っておいた龍舟に乗せ、神歌手が“參船発舟”（あるいは簡単に“龍舟”という）を歌って龍舟に向かって参拝し、それらの凶神が速やかに去り、永遠に戻ってこないことを請う。そして龍舟を川に浮かべ、一匹の黒魚に龍舟を牽かせて遠くに運ばせたり、あるいは龍舟を郊外に（あるいは海まで）運び出して焼いたり、あるいは龍舟を寺院に運んでぶら下げたりする。つまり、ここに一種のはらいの巫術が存在しているということは、疑う必要もないのである。もちろん、そこにははらいだけでなく祈禱も存在している。少し具体的な言葉で形容するならば、ちょうど「硬軟両様の手段をあわせ用いる」ということであろう。人々は凶神に頭を痛めつつもどうすることもできず、ただ神々を招いてもてなし、美味しい食べ物を振る舞い、良いことを言って持ち上げ、それから手のひらを返したように騙して舟に乗せ、神々を遠ざけて、永遠に戻ってきて騒がせることができないようにするしかないのである。ある意味ではこれも一種の“祓除”であり、ただすでに変化してしまっていてそれと識別しにくくなってしまっているのである。

“送龍舟”の民俗活動は、浙江の民間で盛んに行われ、呉越神歌の儀式の中にだけあらわれるのではない。筆者はこのことについて調査研究を行ったことがある。例えば温州一帯では、往時疫病が流行するたびにその地域の人々は道士に“羅天大醮”の儀式をするように頼み、あわせて“送紙船”をする。まず一隻の普通の船とそっくりの大きな紙の船を造る。道士が儀式を行って6日経つと、最後の日に紙船を海まで送り、燃やしてしまう。これで“瘟神”を遠ざけたと考えるのである。温州一帯の“唱霊経”（または“南游”“唱夫人”とも言う）の中では、“送耗”という行事もある。一般的には儀式の過程で3回“送耗”を行い、順序に従ってあらかじめ準備しておいた紙船を川のほとりで焼く。寧波の馬村では、“祓茅船”と呼ばれる儀式があり、これも鬼やらいのためのものである。巫者が種々の演技を行い、妖魔鬼怪を脅して舟に乗せ、その後その“茅船”を水に投げ入れ、遠くに流れるに任せる。麗水一帯では、“送花船”がある。人々は各家庭に隠れたいいわゆる妖魔鬼怪をすべて探し集め、“花船”に乗

せ、それから川の流れるに乗せて遠くに流れるに任せることをシンボリックに行なう。金華では、往時道士が執り行う“打清醮”の儀式があり、その中の行事のひとつにも“送紙船”があった。武義では昔、端午節の祭に“推端午船”の風俗があった。当日城隍廟で祭祀儀礼を行い、大船とも言うべき大きさの紙船を造り、船上に“五鬼”という5体の紙人形を縛りつける。道士が儀式を執り行い、“五鬼”に船に乗るよう催促する。それから人々は紙船を押しで大通りに沿って狂奔し、最後には船を川に投げ入れて遠くに流してしまふ。台州の椒江では、“大暑船”という民俗活動がある。“大暑”の日に、人々は盛大な祭りをを行い、最後に瘟神“五聖”が乗っているという大きな紙船を海まで送り出して焼くのである。習俗上、これもその土地の人々の平穏無事を願うためのものと考えられている。

まとめとしていうと、呉越神歌の儀式中の“送龍舟”はどれも同じようなものであり、古い祓除・驅讎の後世における変化であると理解することができる。浙江の民間では、一般的にそれらを“送瘟神”とも呼ぶ。この龍舟は瘟神のために準備したもので、人々はいろいろな方法を取り、脅したり騙したり、硬軟両様の方法を使って瘟神を龍舟に騙し乗せ、龍舟を川や海まで送り出し、流れに任せたり焼いてしまったりする。これによって災難と病気をすべてはらってしまえんと考えているのである。つまり、これもなお一種の巫術行為なのである。

注：この文章は7月23日に開催したワークショップ「祓いの儀礼と技法」でご報告いただいた顧先生に、ワークショップ終了後ご報告旨に加筆していただき、大学院生の川島純枝さんの手を煩わせて翻訳していただいたものである。ただ紙面の都合で一部割愛して掲載せざるを得なかった。文中にその部分を明示したが、文意を不分明にしまったところがあるかも知れない。筆者・訳者に無断で省略したことをお詫びする。（山口建治）



ワークショップ（2005.7.23開催）の様子。



コラム

Column

日本での十日間

フェルナンド・カルロス・シャマス（サンパウロ大学日本文化専攻院生）

はじめに

私は神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により海外若手研究員として約2週間日本に滞在しました。この期間は日本文化研究を専門とするブラジル人の私にとって非常に有意義な日々でした。

サンパウロ大学日本文化研究所

私はサンパウロ大学哲学・文学・人間科学部日本語・日本文学・日本文化大学院コ-スで日本仏像について修士論文を書いています。私が研究を行っている日本文化研究所は1968年に鈴木梯一先生によって創立され、1976年から日本文化館の中に設置されています。日本語や生け花・茶道など日本文化普及のためのコ-ス、セミナーなどを実施し、日本や他の外国から先生を招聘しています。定期的に、日本語、日本文学、日本文化についての講演を主催する他、個人またはグループの研究プロジェクトをサポ-トし、研究所員によって書かれた*Estudos Japanese* という論文集も発行しています。

研究所の中にあるTeiiti Suzuki図書室は日本語、日本文学、日本文化に関心を持っている人々・他大学の研究生・教師・学生のために開かれています。ここには仏像についての本が多く、日本研究の文献に関しては南米でも一番といわれていますが、やはり限度があります。

日本滞在中

今回の滞在中、鎌倉（明月院、建長寺、浄智寺、円覚寺、鶴岡八幡宮、大仏）京都（観智院、三十三間堂、平等院）と奈良（東大寺、広隆寺、興福寺）で、日本のお寺や仏像にじかに接することができ、いくつかの仏像を面と向かって見ることができたのは貴重な経験でした。東京国立博物館では唐招提寺と法隆寺の建築、絵画や仏像についての展示を見ました。日本では現代においてさえもこのテ-マに未だに関心があるのだと思いました。この唐招提寺の展示が、仏像の原料、技術、種類などや研究の方法論を明らかにしてくれました。お寺や博物館の仏像を前にした日本人を見て、人々が心の奥底から感動している様子を感じとりました。この数年間仏像を研究していた私が、日本を訪れ、今までただ夢でしか見たことのなかった風景の中に立っているような錯覚をおこしました。おかげで今はこれらの仏像をもっと真実性や

感受性をもって言い表すことができます。ブラジル人として古い仏像を、日本人とは違った感受性で見ることができるようになったと思っています。

修士論文では仏像が日本に伝来した頃から平安時代末までの歴史をテ-マとし、数えきれないほどの仏陀の肖像学や象徴について扱っています。日本の仏教はブラジルでも研究されていますが、日本での仏教布教における仏像の歴史的な重要性は研究されていません。滞在中買った本のうちの一冊は曼荼羅についての本ですが、幾何学的なデザインによるその複雑な美しさは非常に興味深いものでした。お寺や博物館の仏像の配置を理解するのに欠かせない曼荼羅の本質的な特徴はブラジル人にはまだ知られていないため、これからも学会等に参加して、研究結果を発表していきたいと思えます。

おわりに

ブラジルは日本から本当に遠いですが日系人は多く、料理、教育や宗教などそれぞれ差はありますが祖先が持ち込んだ日本の文化を保っています。日本人でも日系人でもない私にとって、2週間の滞在中、今まで本、テレビ、映画、美術展や日系人の友達を通して間接的に知っていた文化を実際に見ることができました。ここで経験と、刺激を受けたことで、私はブラジルで仏像の複雑さを説き、日本文化を広めることが少し出来るようになった気がします。

今回の滞在中により、わたしの研究が進歩したのは言うまでもありません。この機会を与えて下さった神奈川大学COEプログラム、そして関係者の皆様から感謝いたします。

（フェルナンド・カルロス・シャマス氏は2005年1月28日から2月11日まで訪問研究員として来日。）

サンパウロ大学日本文化研究所前にて。



コラム

Column

町の商店街と商業民俗研究

韓 同春（北京師範大学大学院民俗学専攻院生）

日本のほとんどの町では、スーパーマーケットや、散在する店と駅の地下街のほかに、アーチ形の屋根付きの市場が見られる。様々な店に挟まれて道の上に、アーチ形の屋根をつけ、道を廊下のようにした市場ができる。この屋根は、雨や陽射しを防ぐほか、商品の衛生を保ち、それぞれ独立した店をひとつの有機体に纏めるなどの機能を持っている。このような市場は商店街と呼ばれ、人々の暮らしの中で、重要な商業活動の場所である。

商店街には、様々な店が集まっており、商品の種類もおびただしい。食料品や野菜、果物をはじめ、洋服や靴、電化製品まで、あらゆる商品が揃っている他、レストランやゲームセンターなどもある。

これらの商店街の多くは、長期にわたって形成され、歴史的・文化的意味が含まれている。地元の人々や行政機関は、商店街の古い風貌を保持し、買い物客と観光客を集める努力をしている。

筆者は、神奈川大学21世紀COEプログラムの招きにより、訪問研究員として日本で調査を始める際、重点的に中心都市の周辺にある村落の商業活動とその影響で変容してきた村落文化の形態を理解し、商業民俗の研究を行うつもりだった。けれども、日本の商業形態を実際に見ると、最も集中し活発なのは、町での商業活動であることがわかり、そのひとつである町の商店街を主な調査対象とした。民俗学の視点から商店街を考察することは、商店街とその周りの人々との関係及び商人たちの暮らしや考え方などを知る上で、重要な役割を果たせると思われる。「横浜の六角橋商店街が非常に面白いので、研究する価値がある。」（大意）という福田アジオ教授のご指摘により、滞在期間2週間の間に、筆者はその六角橋商店街及びその周辺と横浜中華街、京都錦市場、名古屋の商店街（駅の地下街）大阪黒門市場などの商店街を調査した。そして、神奈川大学、東京都立大学、成城大学、京都国立歴史博物館などでは関連資料を調べ、現在の日本における町の商店街について、ある程度の認識を深めることができたと思う。

商業は、普遍的で重要な経済行為のひとつでありながら、人々の暮らし方そのもの、彼らが作り出し、伝承し、エンジョイしてきた生活文化でもある。商業民俗は、民俗研究の重要なテーマのひとつであり、その研究は容易ではない。中国で、その重要性は、既にたくさんの研究

者に意識され強調された。現段階では、ある程度の成果があがっているが、研究をさらに深めて広げていく必要がある。現在、私の所属する北京師範大学大学院民俗学と文化人類学研究所では、商業民俗の研究がなされている。本研究所は、中国文化部の民族民間文化遺産保護プロジェクトに指定され、「北京商業民俗文化調査及び研究」に当たることになった。私の博士論文にも、商業活動と商家の生活などに関する内容が含まれている。

北京師範大学の民俗学研究所は、中国で最も高いレベルを持っている。その多くは、「中国民俗学の父」と呼ばれる民俗学者鐘敬文の北京師範大学での半世紀以上の貢献のお陰である。鐘敬文先生は、若い頃から民俗学に精力を注ぎ、1949年9月、北京師範大学中文系の任に就いてから辞世まで、ずっと本大学で、民俗学の研究と教育のために努力し続けていた。そのご指導により、北京師範大学中文系・中国民間文化研究所には、優れた研究者が集まっており、学術的雰囲気や濃厚な研究機関となっている。数十年の間、民俗学の専門人材を輩出し、研究成果も非常に注目されている。

現在、民俗学は北京師範大学の重点学科に指定されており、大学院の下に、「民俗学と文化人類学研究所」および「民俗学と社会発展研究所」が設置されている。民俗学と文化人類学研究所の主な研究課題は、民間叙事学、民俗誌学、歴史人類学の三つであり、互いにつながり、「民間叙事と歴史記憶」の長期的研究方向を支えている。所長の劉鉄梁教授は、民間文学理論、民俗誌学、村落考察などの領域に、重要な貢献を果たしている方であり、2004年から、「中国民間文化遺産緊急保護プロジェクト」と「中国民俗文化志区縣本の調査及び編纂」に参加された。学生を連れて北京市門頭溝区に入り、地方の民俗協会会員や地元文化研究者とともに現地調査を行い、『中国民俗文化志（区縣本）』の第一集・『門頭溝区民俗文化志』を完成させた。編纂中、「『代表的な民俗を中心で纏める』民俗志編纂法」を創出し、それを『門頭溝区民俗文化志』の編纂に貫いていた。現在、『宣武区民俗文化志』の編纂に着手している。歴史上、宣武区は北京の繁華街であるため、本民俗文化志の編纂は、商業民俗に深くかかわることが予想できる。

（韓同春氏は、2004年12月1日～12月14日訪問研究員として来日。）

同時代を見る眼と博物館

丸山 泰明 (COE研究員・PD)

近年、昭和30年代の生活文化に関するモノを資料として収蔵し展示する博物館が現れるようになってきた。テレビ・冷蔵庫・洗濯機などの電化製品やインスタント食品・プラスチック製品などが展示され、また家での暮らしや商店などの生活空間がまるごと再現される。これらの展示では昭和30年代が以前と比べて生活のあり方や環境との関わり合いが大きく変わった時代として捉えられ、民俗学や歴史学のみならず産業技術史やデザイン史といった角度からも扱われているが、博物館側の意図とは別に、いわゆる「昭和レトロブーム」と連動してマスメディアや来館者からはノスタルジアの対象として消費されてしまうというジレンマもあるようだ。今年「昭和80年」に相当するのだが、経済的なゆとりがありながらも何となく満たされない思いを抱いている老人が、充実し輝いていた30代の壮年の頃を懐かしく振り返っているようなものなのだろうか。

ところで、その当時、生活が激変していく日常をモノから捉えようとする視線は民俗学に存在しなかったのだろうか。実は、全く存在しなかったわけではない。日本常民文化研究所の理事長を務めたこともある桜田勝徳は、1966年に発表した論文「近頃の物質文化の変貌について」(『日本民俗学会報』44号)でモノを通じた生活変化の問題を指摘している。人々の服装は和服から洋服へと変わり、素材も木綿や麻・絹から化繊や人絹といった人造の繊維に変わってきた。漁村へ調査に行くと、数年前にはまだ見ることができた日本独自の伝統的な造船技術が崩れ去り、キール船やアパラ骨と呼ばれる西洋風の造船になっている。左官が泥を捏ね、海草で作った糊や切藁を混ぜて木舞に塗っていく、鎌倉時代の絵巻物でも確認することができる左官の技術は、石膏を固めたボードと呼ばれる穴のあいた板に工場製の糊を混ぜた石膏やセメントを塗るものになっていった。さらにその後になると、クロス(壁紙)が普及し左官の技術そのものが廃れていく。中学卒業後に修行し身につけた技術を時代の変化により捨てて行かざるを得なかった元左官職人を父とする私にはとてもリアルな話である。桜田は言う。「このような重大な変貌期に運悪く際会した以上は、われわれ民俗を調べてきたものとして、民俗の変わっていく過程をなるべく具体的に記録して、後の世代のわれわれの村や民族といった共同体の上に築かれたものの変化を、納得づ

くでうけとってもらえるような配慮を、何とかやっておく責任を感じる。しかし幅の広い民俗の今日の変貌をそうそう追跡することは到底できるものではない。そこで形ある物の変り方に限定して、その窓口から変化の相に入っていくことを心がけてみたいものだと思うのである。」

桜田は「現代における民俗変貌への対処の立場から」(『日本民俗学大系』2巻、平凡社、1958年)などによって、早い時期から民俗学の社会変化への対応を指摘していた民俗学者だった。1960年代は民具・民俗資料の概念が民芸(品)と差異化しつつ手作りの/伝統的なものへ囲い込まれていった時代であり、1963年からは文化財保護委員会による「民俗資料緊急調査」が行われ、1965年には『民俗資料調査収集の手びき』が出版されている。この号はこのような時代を背景として物質文化を特集しており、田原久「有形民俗資料の保護について」、中村たかを「民俗資料の保存管理について」といった有形の文化財としての民具・民俗資料をいかに収集し保存していくかについての論文も収録されている。この時代に形成された「民具・民俗資料である/ない」とする規範が、いまなお博物館での収集・保存・研究の方針に影響を与えているのだが、だとすればこの号は、その後の進み方を決めていく分岐点だったとすることができるのではないだろうか。

何も、桜田の先見の明をただ単に評価したいわけではない。桜田の指摘を真に現代において引き受けようとするならば、次のようなことが言えるのではないかと、いうことである。つまり、今日、博物館資料として収集すべきなのは、需要と供給のバランスにより決まるとされてきた価格を一律に設定し、モノや購買に関する意識、モノの生産現場を変えつつある100円ショップの品々なのではないか。「服の下に着る」という文字通りの意味をはるかに超え、異性/同性の、時に脅迫的な視線に応じて「理想的なライン」へと身体を整形していこうとする女性下着なのかもしれない。写真を「晴れの日の特別な技術によるもの」から変えていった、いわゆる「使い捨てカメラ」やオートフォーカスのカメラ、デジタルカメラやカメラ付きケータイなのかもしれない。「過去」と「未来」の視点から「現在」を異化し、博物館資料として捉えていくこと。試されているのは、同時代を歴史化していく我々の「眼」だと思われるのである。

Ethnologueから見る言語危機の拡大

宮本 大輔 (COE研究員・RA)

今年、Ethnologue: Language of the worldが更新された。本文では、Ethnologue 14th(2000)と同15th(2005)のデータ比較から、言語危機の拡大状況を概観する。Ethnologueのデータは、各言語の現時点での正確な言語使用人口の数値を反映したものではないが、言語区分が非常に細かく、言語危機の状況を概観する上では有効な資料である。Table1はEthnologue 14th・15thに記載がある1,000人未満の危機言語をその使用人口によって分類・比較したものである。なお、言語危機度は便宜上A、B、C、Dと分類した。

世界の言語総数は6,809 6,912となっている。この増加は、新言語発見によるものだと考えられる。しかし、その一方で、消滅していく言語も存在する。Table1を見ればわかるように、2つのデータを比較すると、危機度Cに属する言語が302 344、危機度Bに属する言語の数が130 151、と急激に増加している。危機度Aに分類される言語数の数はオーストラリアが最も多い。オーストラリアでは、18世紀後半からイギリスによって植民地化が進められた結果、大陸東南部のマイノリティ言語はそのほとんどが消滅してしまった。

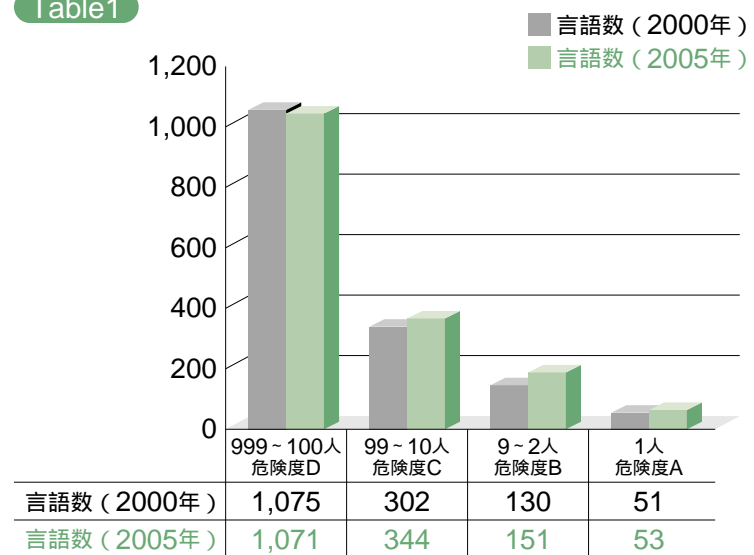
危機度Aの言語を比較したところ、15thではいくつかの言語が新たに消滅(extinct)していた。具体的には、Cholón(Peru) Abnaki, Eastern (USA) Miwok, coast (USA) Pome, North-eastern (USA) Wappo(USA) Narungga (Australia) Nugunu(Australia) 等である。

危機度Aの言語には、台湾の原住民族語である亀崙(Kulon-Pezeh)語も含まれている。この言語はEthnologue 14thでは、すでに消滅したとされていたが、Paul Jen-Kuei Li(2000)の報告によって、86歳の話者が存在することが確認された。だが、この言語は「ほぼ消滅(Nearly extinct)」に分類され、依然として消滅の危機に瀕していることに変わりはない。

私が研究対象としている中国の言語総数(方言及び共通語、民族語、部族語等を含む)は、201 235となっている。その内、言語使用人口(バイリンガルを含む)が1,000人未満の言語は17 24と増加している。危機度Aに分類される言語はないが、危機度Dに分類されるものは比較的多く、代表的な例としては、満語、シベ語、ホジェン語などがあげられる。これらのマイノリティ言語を保護する言語政策も施行されているが、それと同時に、中国では共通語政策が強力に推し進められており、一部では次のような矛盾をきたしている。現在、施行されているマイノリティ言語保護政策は、政府公認の55の民族語のみを対象としたものであり、政府非公認の地域語・部族語の保護については何も言及していない。そのため、政府非公認のマイノリティ言語は、全国的な威信言語である共通語と地域的な威信言語の二つによって押しつぶされる形となり、消滅の危機に瀕している。

言語使用人口の減少は、その言語を用いる場面の減少、母語話者の言語的退化にもつながり、最終的には言語の消滅を招く。また、言語はただのコミュニケーションの道具ではない。人間の脳の高次機能を司ると同時に文化の運び手という役割を果たしている。この言語の消滅は、人類の文化的多様性の危機を招く危険性をはらんでいる。

Table1





主な研究活動

2005年度	研究推進会議
第4回	6月 1日 (中間評価の現地調査への対応、第1四半期予算執行状況について 他)
第5回	6月29日 (中間評価の現地調査への対応、データベースの作成及び公開について 他)
第6回	7月 8日 (中間評価現地調査質問事項への対応、調査研究協力者の登録について 他)
第7回	7月29日 (中間評価現地調査報告、海外提携研究機関への派遣・訪問研究員について 他)
第8回	9月 1日 (現地調査および追加説明資料、実験展示および高度専門職学芸員養成方法検討、ワーキンググループ答申について 他)
第9回	9月28日 (COE教員・COE研究員(RA)人事、外部評価への対応、地域における統合と情報発信検討、派遣研究員および訪問研究員について 他)

2005年度	全体会議
第2回	7月 8日 (中間評価現地調査への対応、情報発信のワーキンググループ編成、海外提携研究機関派遣若手研究員・訪問研究員について 他)

2005年度 研究会 (2005年6月～7月実施分)

全体

第2回・7月8日 木下 宏揚・木下 慶子(調査研究協力者)/
COEにおける非文字資料の共有と流通 福島県只見町のデータ化に向けて
佐野 賢治/
資料のコラボレーションから資料館建設まで 飯豊山信仰展示を事例として

班

6月 6日・1班 佐多 芳彦(大正大学・立正大学非常勤講師)/
データベース構築を前提とした肖像画の画面記述について 有職故実学の立場から
6月10日・1班 東アジア生活絵引き編さんおよび日本近世・近代生活絵引き編さん
6月29日・1班 『常民生活絵引』マルチ言語版の編さん
7月 1日・4班 水嶋 英治(常磐大学教授)/大学院における博物館学教育
7月20日・2班 廣田 律子/モーションキャプチャを使っの演技の比較への取り組み

ワークショップ

7月23日 13:30～16:00 「袷の儀礼と技法」 (本文「研究会報告」P.22、23参照)
会場：神奈川大学横浜キャンパス 17号館215室
企画・主催：外国語学研究科中国言語文化専攻
コメンテーター：廣田 律子(神奈川大学教授)
顧 希佳(杭州師範学院教授)
「呉越神歌の文化史意義 袷の儀礼からみた」
アレクサンドル・グラ(立命館大学専任講師)
「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」

主な研究活動

現地調査

(2005年6月～9月実施分)

佐野 賢治	福島県南会津郡(6月4日～7日)
只見町教育委員会で民俗・民具資料の現地調査	
山口 建治、廣田 律子	中国 江西省南昌市・南豊県(6月10日～16日)
江西国際儺文化芸術祭での伝統芸能の身体技法調査と儺文化国際検討会への参加	
河野 通明	長野県松本市・塩尻市・豊科町(6月16日～18日)
日本民俗資料館・塩尻市民具収蔵庫・豊科町郷土博物館での在来農具の比較調査	
中村 ひろ子	北海道小樽市(6月17日～19日)
日本展示学会への出席および小樽市博物館・小樽市運河プラザでの現地調査	
三鬼 清一郎	愛知県名古屋市(6月17日～21日)
名古屋大学図書館、名古屋市博物館他で文献史料の調査研究	
八久保 厚志	静岡県沼津市(6月18日～19日)
三浦地区の景観記録、資料収集	
金 貞我	韓国 ソウル(6月22日～26日)
ソウル市立大学博物館他にて所蔵作品の調査	
青木 俊也	茨城県水戸市(6月23日)
常磐大学で行われる全国大学博物館学講座協議会大会への参加	
河野 通明	山口県平生町・周東町・由宇町他(6月23日～24日)
平生町民具館・周東町祖生民俗資料館・由宇町歴史民俗資料館他での在来農具の比較調査	
君 康道	長野県長野市・上田市・小諸市・佐久市(6月24日～26日)
善光寺・常楽寺・十念寺・金台寺での絵引き関連資料収集	
佐々木 睦	香港(6月24日～29日)
香港大学他で東アジアの図像資料(特に祠廟・寺院における図像)の収集	
青木 俊也	大阪府大阪市(7月2日)
大阪市立すまいのミュージアムにおいて生活再現などの展示方法、ならびに実験展示情報の収集	
川田 順造	モンゴル ウランバートル・ホブド(7月4日～18日)
身体技法・感性の領域の現地調査	
西 和夫	新潟県新潟市(7月5日)
北方文化博物館新潟分館所蔵の絵画史料の調査検討	
北原 糸子	愛知県豊田市(7月13日～14日)
日本赤十字豊田看護大学所蔵の濃尾地震救済活動資料の調査	
廣田 律子	秋田県田沢湖町(7月21日～22日)
わらび座デジタルアートファクトリーにてモーションキャプチャによるデジタル資料の収録	



主な研究活動

現地調査

(2005年6月～9月実施分)

佐野 賢治・橋川 俊忠・藤永 豪	福島県南会津郡(7月21日～22日)
総合情報発信プログラムのための只見町との協議及び資料収集	
中島 三千男	韓国 全羅南道(8月4日～13日)
旧朝鮮全羅南道における海外神社跡地調査の実施	
河野 通明	長野県梓川村・高森町他、新潟県上越市他(8月8日～20日)
梓川村資料館・高森町歴史民俗資料館・上越市総合博物館・新潟県立歴史博物館他での在来農具の比較調査	
須山 聡	韓国 江原道・慶尚北道・ウルサン・ソウル(8月14日～27日)
渋沢フィルムの現地比定と、それに関連する資料の収集	
浜田 弘明・須山 聡	韓国 プサン・ウルサン・ウンサン・ソウル(8月16日～23日)
渋沢フィルム韓国景観写真の現地調査	
三鬼 清一郎	大阪府大阪市・兵庫県姫路市他(8月22日～27日)
大阪城天守閣、姫路城城郭研究室他で文献史料の調査研究	
山口 建治	和歌山県西牟婁郡白浜町(8月23日～25日)
南方熊楠記念館にて所蔵漢籍調査	
山口 建治	中国 西安市、合陽県、北京市(8月28日～9月5日)
地方人形劇団に関する現地調査	
菊池 勇夫	青森県青森市・北海道松前郡松前町(8月30日～9月1日)
青森県立郷土館、松前町郷土資料館などにて北方・南島関係資料の確認、ならびに諸資料読解のための現地調査	
河野 通明	富山県砺波市・氷見市・魚津市他(9月1日～6日)
砺波郷土資料館・氷見市立博物館・魚津市歴史民俗博物館他での在来農具の比較調査	
君 康道	和歌山県和歌山市・粉河町・那智勝浦町他(9月2日～4日)
和歌山県立博物館、粉河寺、那智大社他にて絵引き関連資料収集のための現地調査	
大里 浩秋・孫 安石・富井 正憲	中国 武漢・上海(9月17日～23日)
武漢市档案馆、上海市档案馆での資料収集、現地調査	
君 康道	北海道札幌市・旭川市・帯広市(9月19日～24日)
北海道大学図書館、旭川市立博物館、帯広百年記念館他にてアイヌ関係文献資料および画像資料の調査・収集	
佐野 賢治	アメリカ カンザス・ボストン・サンフランシスコ(9月22日～10月2日)
アメリカにおける学芸員養成課程の現地調査、および博物館展示、資料保存・検索法の実地調査	
丸山 宏	台湾 台北市(9月23日～26日)
国立中央図書館で民間信仰・道教で使われている画像表現に関する資料調査	
河野 通明	富山県砺波市・富山市・滑川市他(9月29日～10月2日)
砺波郷土資料館・山田村歴史民俗資料館・滑川市岩城家住宅他での在来農具の比較調査	

調査研究協力者

本学プログラムの調査研究活動を支援していただくため、今年度のCOE調査研究協力者に下記の方々が委嘱されました。

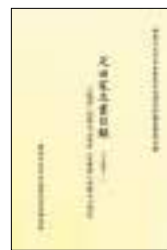
2005年9月現在

班	氏名	所属部局・職名
1	フレデリック・ルシーニユ	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課程
2	関根 祥人	観世流能楽師
4	ウィリアム・リンゼイ	カンザス大学宗教学部准教授、神奈川大学研究員
1	ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課程
4	木下 慶子	神奈川大学大学院工学研究科電気電子情報工学博士前期課程
4	小松 大介	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士後期課程
1	アラン・クリスティ	カリフォルニア大学サンタクルス校准教授、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所非常勤講師
2	岡本 浩一	株式会社わらび座デジタルアートファクトリー研究員
1	サイモン・ジョン	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所博士前期課程

日本常民文化研究所

神奈川大学日本常民文化研究所調査資料目録『疋田家文書目録』二分冊
山城国乙訓郡大山崎荘(京都府乙訓郡大山崎町)

2005年3月発行、A4判 計796ページ。
編集・発行：
神奈川大学日本常民文化研究所



歴史民俗資料学研究所

神奈川大学歴史調査報告第2集
『渋江公昭家文書目録(1)』

2005年3月発行、A4判 447ページ。
編集：田上 繁
発行：神奈川大学大学院
歴史民俗資料学研究所



外国語学研究所 中国言語文化専攻

神奈川大学中国学会第6回大会

日時：2005年11月5日 13:00～16:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス 20号館116室

報告：山口 建治(神奈川大学外国語学部教授)

「クグツ(傀儡子)の源流をたずねて」

川島 純枝(神奈川大学大学院中国言語文化専攻博士課程3年)

「宝巻に見る浙江の観音信仰について」

中道 隆(神奈川大学大学院中国言語文化専攻修士課程2年)

「侯宝林と馬三立一二人から探る相声の芸」 他

2005年度海外提携研究機関と派遣研究員・訪問研究員

2005年9月現在

提携機関

■中国 中山大学中国非物質文化遺産研究センター

派遣研究員

氏名：宮本 大輔(COE研究員・RA)

派遣先：浙江大学日本文化研究所

期間：2005年11月1日～11月14日

研究課題：浙江省におけるショー族の言語使用状況

訪問研究員

氏名：尹 笑非(華東師範大学民俗学専攻院生)

受入れ期間：2005年9月17日～9月30日

研究課題：東アジアで増大し変化する中国人一般生活の吉兆研究

氏名：王 欣(浙江大学客員研究員、浙江工商大学教員(助手))

受入れ期間：2005年11月8日～11月21日

研究課題：教科書における中国関係の挿絵の調査研究

氏名：Diogo KAUPATEZ(サンパウロ大学日本文学専攻院生)

受入れ期間：2005年11月13日～11月29日

研究課題：江戸時代の浮世絵、葛飾北斎についての研究

COE支援事務担当



7月より下記の事務員が新しく加わりました。

神原 朋之・IT担当

COEのホームページで構築するデータベースの制作を担当します。よろしくお願いたします。

編集後記

今夏が登山で言えば中腹の見晴らし点、見直すべき点は見直し、更なる高みを目指すことになる。本誌も、対談で取り上げた山伏、修験のように山のエネルギーを吸収し、一新を図りたい。秋、国際シンポジウムの企画はじめ研究の成果が色づき、実り始めている。今年度の年報、報告書の準備も始まり、非文字ならぬ文字による研究成果の山も高くなりそうだ。紅葉の山が呼んでいる。(佐野)

国内外への出張で忙しい先生方が大学に戻られた9月、一斉に様々なことが動き始めました。そのひとつが今年初めて主催するCOE国際シンポジウムです。プレシンポジウム、展示など本シンポジウム前後にも企画が盛りだくさんですので、学内外を含めて多くの方々に足を運んでいただければ、スタッフ一同準備を進めております。(関)